

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第79集

# 西 土 生 遺 跡

2012

財団法人 山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第79集

にし は ぶ い せき  
西 土 生 遺 跡

2012

財団法人 山口県ひとつくり財団

山口県埋蔵文化財センター



## 序

本書は岩国市土生に所在する西土生遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。この調査は県営中山間地域総合整備事業 南河内地区に先立ち、山口県岩国農林事務所および山口県教育委員会から委託を受けて財団法人山口県ひとつづくり財団が実施しました。

調査の結果、平安時代の大型建物跡や中世・近世の土坑などの遺構と、縄文時代から江戸時代にかけての土器・石器・陶磁器などの遺物が発見されました。特に平安時代の大型建物跡は荘園に関連した遺構である可能性が高く、これまで不明であった岩国市内陸部の歴史像に新たな知見を加える資料となりました。

本書が、文化財保護に対する理解をより深める資料として、また教育並びに学術研究、郷土の歴史を学ぶ資料として広く活用されることを願うものであります。

最後に、発掘調査の実施並びに報告書作成に当たってご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

財団法人 山口県ひとつづくり財団  
理事長 藤 井 俊 彦

## 例 言

- 1 本書は平成 23 年度に実施した西土生遺跡（岩国市土生地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は財団法人山口県ひとづくり財団が山口県岩国農林事務所農村整備部の委託（契約名：県営中山間地域総合整備事業 南河内地区 平成 23 年度 埋蔵文化財発掘調査業務）ならびに山口県教育委員会の委託〔契約名：平成 23 年度県営ほ場整備事業に伴う南河内地区（西土生遺跡）発掘調査業務〕を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体	財団法人山口県ひとづくり財団	山口県埋蔵文化財センター
調査担当	文化財専門員	岩 崎 仁 志
	文化財専門員	石 川 彰
	文化財専門員	谷 口 哲 一（山口県教育庁社会教育・文化財課）
- 4 調査に当たっては、山口県教育委員会、山口県岩国農林事務所ならびに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 5 土器の一部（49）の所見については高槻市教育委員会 橋本久和氏、石器の一部（73・74）の石材鑑定については山口県立山口博物館 学芸課長 亀谷 敦氏のご教示を得た。
- 6 遺跡の歴史的 position 等については、山口大学人文学部 准教授 真木隆行氏のご教示を得た。
- 7 本書の第 1 図は国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図「玖珂」・「渋前」を複製使用した。また、第 2 図・第 22 図は山口県岩国農林事務所提供の図を基に作成した。
- 8 本書における方位はすべて国土座標（世界測地系）の北で示し、標高は海拔高度（m）である。
- 9 本書に使用した土色標記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』Munsell 方式による。
- 10 図版中の遺構・遺物番号は実測図の番号と対応する。
- 11 本書で使用する遺構略号は次のとおりである。

SB：掘立柱建物跡	SD：溝	SK：土坑	SP：柱穴
-----------	------	-------	-------
- 12 本書の作成・執筆は岩崎・石川が共同で行い、編集は岩崎が担当した。

# 本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査に至る経緯と調査の概要	3
III	調査の成果	5
1	遺構	5
(1)	掘立柱建物跡	5
(2)	溝	12
(3)	土坑	12
2	遺物	15
(1)	掘立柱建物に伴う遺物	15
(2)	柱穴および土坑出土遺物	16
(3)	遺構に伴わない遺物	19
IV	まとめ	21
(付編)	西土生遺跡発掘調査に係る花粉分析	23

## 挿図目次

第1図	西土生遺跡の位置と周辺の主な遺跡・・・1	第12図	掘立柱建物跡関連遺物実測図・・・15
第2図	掘立柱建物跡配置図・・・・・・・5	第13図	柱穴・土坑出土遺物実測図・・・・・・・16
第3図	掘立柱建物跡(SB 1)実測図・・・・・・・6	第14図	土坑(SK 9)出土遺物実測図・・・・・・・16
第4図	掘立柱建物跡(SB 1)構成柱穴実測図・・・8	第15図	土坑(SK11・17)出土遺物実測図・・・16
第5図	遺構配置図・・・・・・・9・10	第16図	遺構に伴わない遺物実測図(1)縄文時代～弥生時代の土器・・・17
第6図	掘立柱建物跡(SB 2)実測図・・・・・・・11	第17図	遺構に伴わない遺物実測図(2)古代～中世の土器・・・17
第7図	掘立柱建物跡(SB 2)構成柱穴実測図・・・11	第18図	遺構に伴わない遺物実測図(3)中国製磁器・・・18
第8図	掘立柱建物跡(SB 3・SB 4)実測図・・・12	第19図	遺構に伴わない遺物実測図(4)縄文時代の石器・・・18
第9図	溝実測図・・・・・・・12	第20図	遺構に伴わない遺物実測図(5)弥生時代の石器・・・19
第10図	土坑実測図(1)・・・・・・・13	第21図	遺構に伴わない遺物実測図(6)その他の遺物・・・19
第11図	土坑実測図(2)・・・・・・・14	第22図	西土生遺跡と周辺地形・・・・・・・21

## 表目次

第1表	その他の土坑計測表・・・・・・・	13
第2表	出土遺物計測表(1) 土器類・・・・・・・	20
第3表	出土遺物計測表(2) その他の遺物・・・・・・・	20

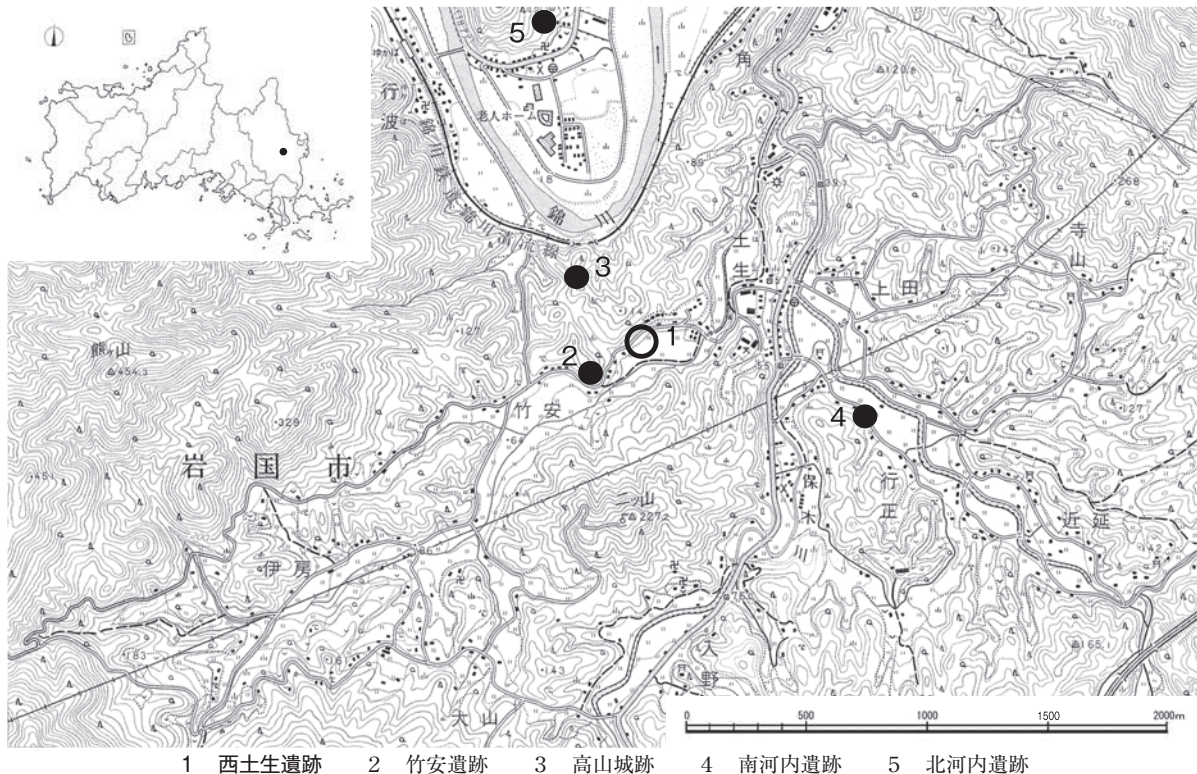
## 図版目次

図版1	調査前遺跡遠景(東から)、調査前遺跡近景(西から)	図版9	SP84 礫出土状況、SP86 礫出土状況、SK 9 土器・礫出土状況、SK 9 土器・礫出土状況(部分)、SK 9 土器出土状況(礫除去後)
図版2	遺跡遠景(西から)	図版10	SK11 陶磁器・礫出土状況、SK11 陶磁器出土状況(部分)
図版3	遺跡遠景(南から)、遺跡近景(東から)	図版11	出土遺物(1)
図版4	調査区全景	図版12	出土遺物(2)
図版5	調査区西側遺構集中地区	図版13	出土遺物(3)
図版6	SB 1・SB 2 完掘状況	図版14	出土遺物(4)
図版7	SB 3・SB 4 完掘状況、SP87 土器出土状況、SP68 土器・土錘出土状況		
図版8	SP67土器出土状況、SP61土器出土状況、SP64礫出土状況、SP85石鍋出土状況		

# I 遺跡の位置と環境

西土生遺跡は、岩国市土生地内に所在する。山口県東部に位置する岩国市は、平成 18（2006）年に、旧岩国市と周辺 7 町村が合併し、県下最大の面積をもつ新岩国市として発足した。岩国市は東に瀬戸内海芸灘を臨み、北・西・南の三方は、標高 500 ～ 1300 m 級の山々が連なる。市の北東部から南西部方向に並行して見られる断層谷は、北の中国山地から南の瀬戸内海に向けて階段状に広がっており、古くから交通路として利用されてきた。駅家の置かれた石国（現岩国市関戸）－野口（現岩国市玖珂町野口）間を結ぶ山陽道や国道 2 号線甘木峠付近などは、その一例といえる。また、山口・島根の県境に位置する筋ヶ岳を水源とし、市域を東流する錦川は、流域の岩質が緻密で硬く、複雑な流路をたどりながら各地に峡谷を形成しており、川の両岸には国道 187 号線と錦川清流線が並行して走る。

本遺跡は旧岩国市域の西端、現岩国市のほぼ中央に位置し、蓮華山を主峰とした周防丘陵中起伏山地に囲まれた南河内盆地の北縁、標高約 50 ～ 60 m の台地上に所在する。本遺跡の南側を流れる竹安川は、大山に端を発して盆地のほぼ中央で保木川と合流し錦川に注ぐが、南河内盆地一帯は花崗岩地帯で岩質の風化が早く、土地の起伏は緩やかで平坦なため、広範囲にわたり水田地帯が開けている。とりわけ保木川と錦川の合流地点に広がる保木平野は、かつて岩国市有数の水田地帯であった。また、本遺跡は、遺跡の北側にある標高 120 m 程度の低丘陵を超えると、錦川本流へはわずか 500 m の距離にある。このように南河内盆地は、県下最長にして最大規模を誇る錦川と密接なつながりを持ち、当地をはじめその流域には、いくつかの集落が古くから点在していた。当地から錦川の河口まで約 14 km の距離があるが、記録によると、近代には近接する天尾や荒瀬、さらに上流の広瀬や府谷と岩国を



第 1 図 西土生遺跡の位置と周辺の主な遺跡



結ぶ舟が紙や薪、米などを積んで往復したとあり、錦川が物流の重要な位置を占めたであろうことは想像に難くない。

本遺跡が所在する錦川流域では、南河内盆地より上流の錦町や、錦川支流の宇佐川・本郷川流域を中心に、旧石器・縄文時代の遺跡が確認されており、特に本郷川流域の郷遺跡では、約 3500 年前の縄文時代後期の落とし穴が発見されている。また、当地より下流の西ヶ尾遺跡では、縄文時代早期後半の竪穴住居跡が発見された。その後弥生時代になると、本遺跡を含む錦川中流域でも、人々の生活の痕跡を確認することができ、本遺跡の西方約 200 m に近接する竹安遺跡では、弥生時代後期の所産とされる壺数点が発見された。中には、高さが約 70cm に及ぶ大型のものもあり、大人用の壺棺の可能性が指摘されている。また、錦川の北岸には、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡と考えられる北河内遺跡が所在しているが、詳細については明らかになっていない。

古墳時代以降の遺跡はあまり確認されておらず、当該期の様相は不明な点が多い。奈良時代に入ると概ね現在の岩国市を中心とする地域に玖珂郡が成立した（『続日本紀』）。さらに平安時代以降、国衙領の少ない玖珂郡内では、錦川下流域を中心とする石国庄、多田・御庄地域を中心とする石国本庄、錦川上流域一帯の山代庄など、多くの荘園が成立したとされる。南河内盆地周辺についての詳細は不明であるが、中世以降当地一帯は「河内郷」と呼ばれるようになり、遺跡東側に所在する寺山日光寺旧蔵の文書に「周防国山代庄河内郷日光寺本免勘料田等之事」とあることから、河内郷は山代庄に属していたことがわかる。山代庄が荘園として機能していた時代には、荘園領主から現地へ派遣されて預所に詰めた雑掌が荘園経営の責任者となり、公文・下司などと呼ばれた現地下級荘官を指揮したと考えられる。なお、この中世期の遺跡としては、本遺跡の北西丘陵上に高山城跡が所在するが、詳細は不明である。

さて、本遺跡の北約 1500 m に所在する椎尾八幡宮の棟札は、中世から近代期の当地を物語る貴重な資料となっている。記録をたどると、平家方についた石国氏の一族が、壇ノ浦での合戦後、錦川上流へと移り住み、椎尾八幡宮を氏神としてこの地に根づくが、しだいに外来の高木氏の勢力が優勢となり、それに合わせて椎尾八幡宮も河内郷全域の氏神となっていった様子が見てとれる。河内郷はその後、慶長 5（1600）年に山代庄から離れて岩国領となり、さらに寛永 20（1643）年に分割され、本遺跡周辺は現在の地名に残る土生村となった。なお、遺跡名の土生について『玖珂郡志』では、「土生伯耆守国広住ス」に由来するとしている。

#### 引用・参考文献

- 岩国市史編さん委員会『岩国市史』通史編一 自然・原始・古代・中世 2009 年  
岩国市史編纂委員会『岩国市史』史料編一 自然・原始・古代・中世 2002 年  
広瀬喜運（桂芳樹校訂）『玖珂郡志』 1975 年  
下中邦彦『日本歴史地名大系第 36 巻 山口県の地名』 1980 年

## Ⅱ 調査に至る経緯と調査の概要

岩国市土生地区においては場整備事業（県営中山間地域総合整備事業 南河内地区）が計画されたことを受け、山口県教育委員会により平成22年度に同地区で試掘調査が実施された。その際に土生地区西部の台地上で柱穴が検出され弥生土器・須恵器等が出土したことから集落遺跡の存在が確認された。そして、新たに発見された遺跡は地区名等から西土生遺跡と呼ばれることとなった。

試掘調査の所見をもとに遺跡の取り扱いについて山口県岩国農林事務所と山口県教育委員会との間で協議が行われた。その結果、西土生遺跡範囲内のうち事業実施により掘削を受ける1,180㎡について、発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。そして、発掘調査は山口県岩国農林事務所および山口県教育委員会からの委託を受け、財団法人山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センターが実施することとなった。

現地調査に先立ち、平成23年6月6日から調査事務所駐車場整地および表土除去に着手した。6月10日には駐車場整地を終え、6月13日に発掘調査事務所を設置した。6月14日には表土除去を終えるとともに、発掘調査器材を搬入し、調査事務所の電気配線工事を行った。同日、作業員による除草作業・遺構検出および遺構掘込み等の作業を開始し、調査の進展に従って随時調査員が各遺構の実測図作成および記録写真撮影等を行った。また、出土遺物については随時山口県埋蔵文化財センターに持ち帰り、洗浄・接合・復元等の整理作業を実施した。

7月11日には国土座標杭を設置し、以後はこれを基準として遺構および遺物出土状況等の記録作成を行った。遺構掘込みがほぼ終了した8月11日にはラジオコントロールヘリコプターにより空中写真撮影を実施し、完掘状況および周辺地形等を記録した。

遺構掘込み完了後の8月20日にはそれまでの調査で得られた成果を公開する場として現地説明会を開催した。現地説明会では遺跡内部を一般に公開するとともに出土品を現地に展示し、調査員が遺構・遺物について随時解説した。8月26日には調査員による記録作成を終了した。

縄文時代の耕作具や収穫具、弥生時代の石庖丁などが出土し、本遺跡が農耕地とし



表土除去



遺構掘込み

て利用されていた可能性が高まったことから、花粉分析を行ってこれを検証した（分析結果については本書に付編として掲載した）。

発掘調査器材を8月29日に撤収し、電気配線撤去工事を8月30日に行い、8月31日には発掘調査事務所を撤収して現地におけるすべての作業を終了した。これを受け、9月1日には山口県岩国農林事務所による完了確認の後、現地を引き渡した。

以後、かねてから進めていた記録類の整理に本格的に着手し、新たに遺物の実測図作成および写真撮影を行った。合わせて挿図・表・写真図版の作成、原稿執筆等の作業を続け、平成24年3月16日には発掘調査報告書（本書）を刊行した。



空中写真撮影



現地説明会

### Ⅲ 調査の成果

#### 1 遺構

掘立柱建物跡 4 棟、土坑 18 基、溝 2 条、柱穴約 330 個が発見された。

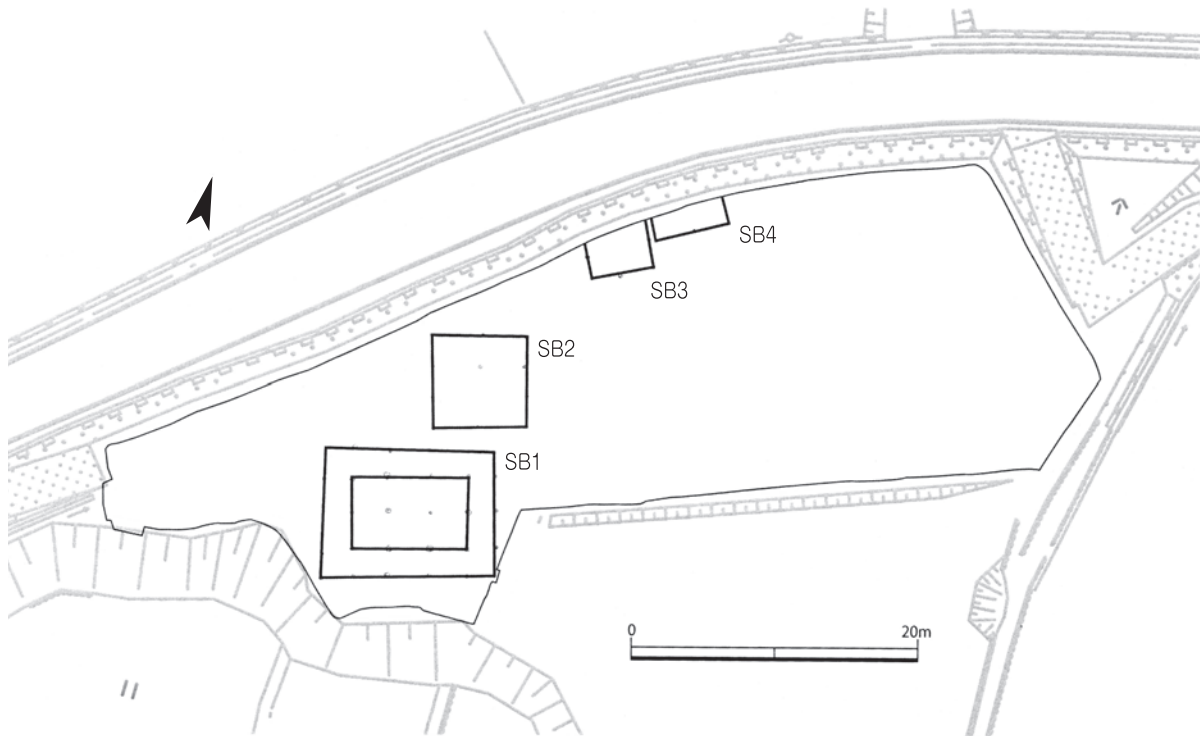
遺構面は黄褐色ないしオリーブ灰色の粘質土層上面であり、これを黒褐色ないし暗オリーブ褐色の粘質土（遺物包含層）が覆っている。調査区は北から南に張り出す山麓台地上にあり、遺構面は西から東に向けて緩やかに傾斜する。以下に、主な遺構を紹介する。

##### (1) 掘立柱建物跡

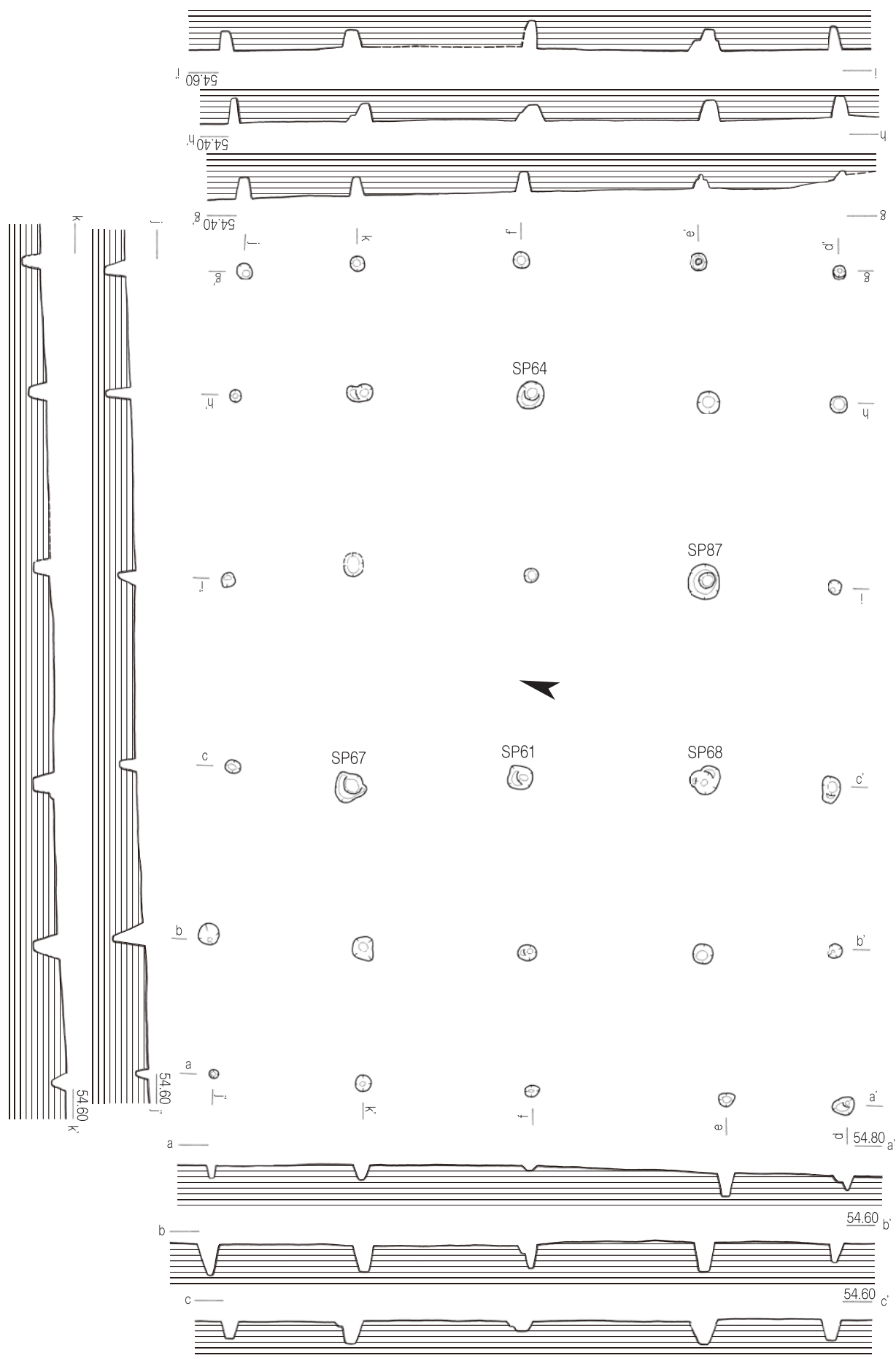
掘立柱建物跡は大型の 2 棟が調査区西部、小型の 2 棟が調査区中央北部にそれぞれ隣接したかたちで検出された（第 2 図）。

SB 1（第 3 図、図版 6～8） 四面廂の大型建物である。建物外周に配置された柱穴は、これ以外の柱穴に比して規模が小さいことから、桁行 3 間、梁行 2 間の身舎の周囲に廂をもつ建物と判断した。総床面積は約 105㎡で、このうち身舎部分は約 40㎡である。建物の主軸方位は N 73° E である。身舎部分は柱間寸法は東西方向で 2.6 m + 3.0 m + 2.6 m であり、南北方向で 2.4 m + 2.6 m（北から南）である。廂部分の幅は 1.9～2.2 m である。

身舎部分を構成する柱穴のうちいくつかからは遺物等が出土した（第 4 図、第 12 図 1～10）。SP61 は 2 段掘りの柱穴上段ほかから土師器皿 2 点（第 12 図 1・2）が出土した。SP68 は埋土中から土師器椀 2 点および土錘 2 点が出土し（第 12 図 3・4・9・10）、底面に接して円礫が遺存した。



第 2 図 掘立柱建物跡配置図



第3图 掘立柱建物跡 (SB 1) 実測図

SP87は埋土上層から複数の円礫とともに土師器椀2点および土師器甕片が出土した(第12図5・6・8)。SP67は底面からわずかに浮いた状態で土師器甕の大型の破片(第12図7)が出土した。これらの柱穴は何らかの祭祀行為の痕跡をとどめていると考えられる。なお、SP64は埋土に遺物を含まないが、底面に接して礫が遺存した。

これら柱穴の出土遺物は11世紀後半に比定でき、この建物の廃絶年代を示していると考えられる。

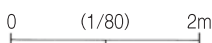
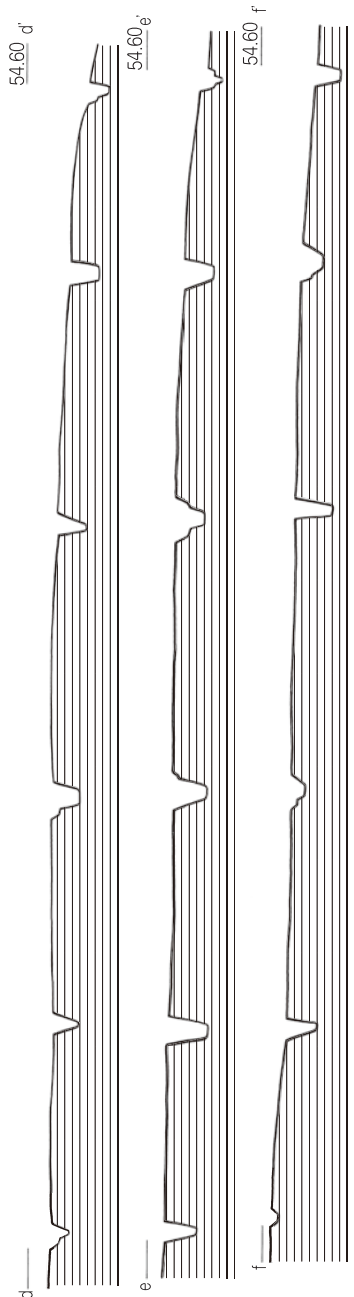
**SB 2 (第6図、図版6・8・9)** SB 1に隣接する総床面積約40㎡の桁行3間、梁行2間の建物で、主軸方位はSB 1と同じN73° Eである。柱間寸法は南北方向で2.1 m前後、東西方向で3.1 m + 3.3 m (南側、西から東) および、3.5 m + 3.1 m (北側、西から東) である。建物の北東部分には束柱の可能性を有する浅い柱穴2個がみられる。建物を構成する柱穴は隣接するSB 1に比して深さには大きな差はないものの、明らかに径が小さい。このため、両者は異なる構造および機能をもっていた可能性が高い。

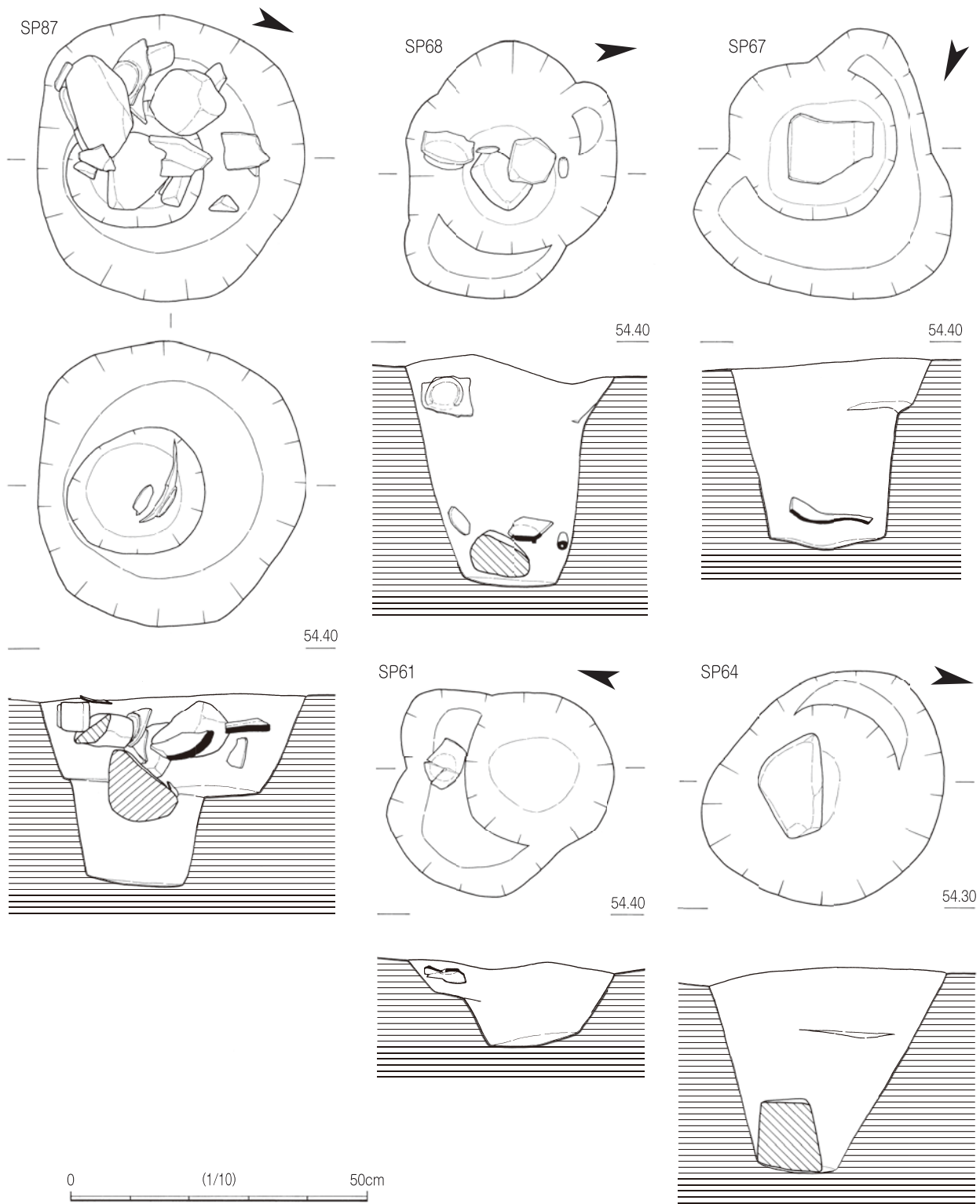
建物を構成する柱穴から石鍋1点と土錘1点および角礫が出土した(第7図)。いずれも埋土中位からの出土であり、礎石等とは考えられない。SP85から出土した石鍋(第12図11)は全体の4分の1程度の破片であり、11世紀前半代を中心とする時期の遺物である。この石鍋は把手部分を下に向け、全体として水平に埋置されたような状況で出土した。また、土錘(第12図12)はSP83から単独で出土した。これらの柱穴は何らかの祭祀行為の痕跡をとどめていると考えられる。

SB 2を構成する他の柱穴からはSB 1と同様、11世紀後半の特徴をもつ土師器小片が出土しており、石鍋の年代を考え合わせても、この建物の廃絶時期はSB 1と大きな時期差がないと判断される。

**SB 3 (第8図、図版7)** 建物の主軸方位はN62° Eである。柱間寸法は東西方向で2.0 m + 2.2 m (西から東) である。建物を構成する柱穴からは積極的に建物時期を推定できる遺物は出土していないが、SP96から器壁の薄い土師器椀細片が出土しており、平安時代後半期の建物である可能性を指摘できる。

**SB 4 (第8図、図版7)** 建物の主軸方位はSB 3と同じN62° Eである。柱間寸法は東西方向で2.7 m + 2.5 m (西から東)



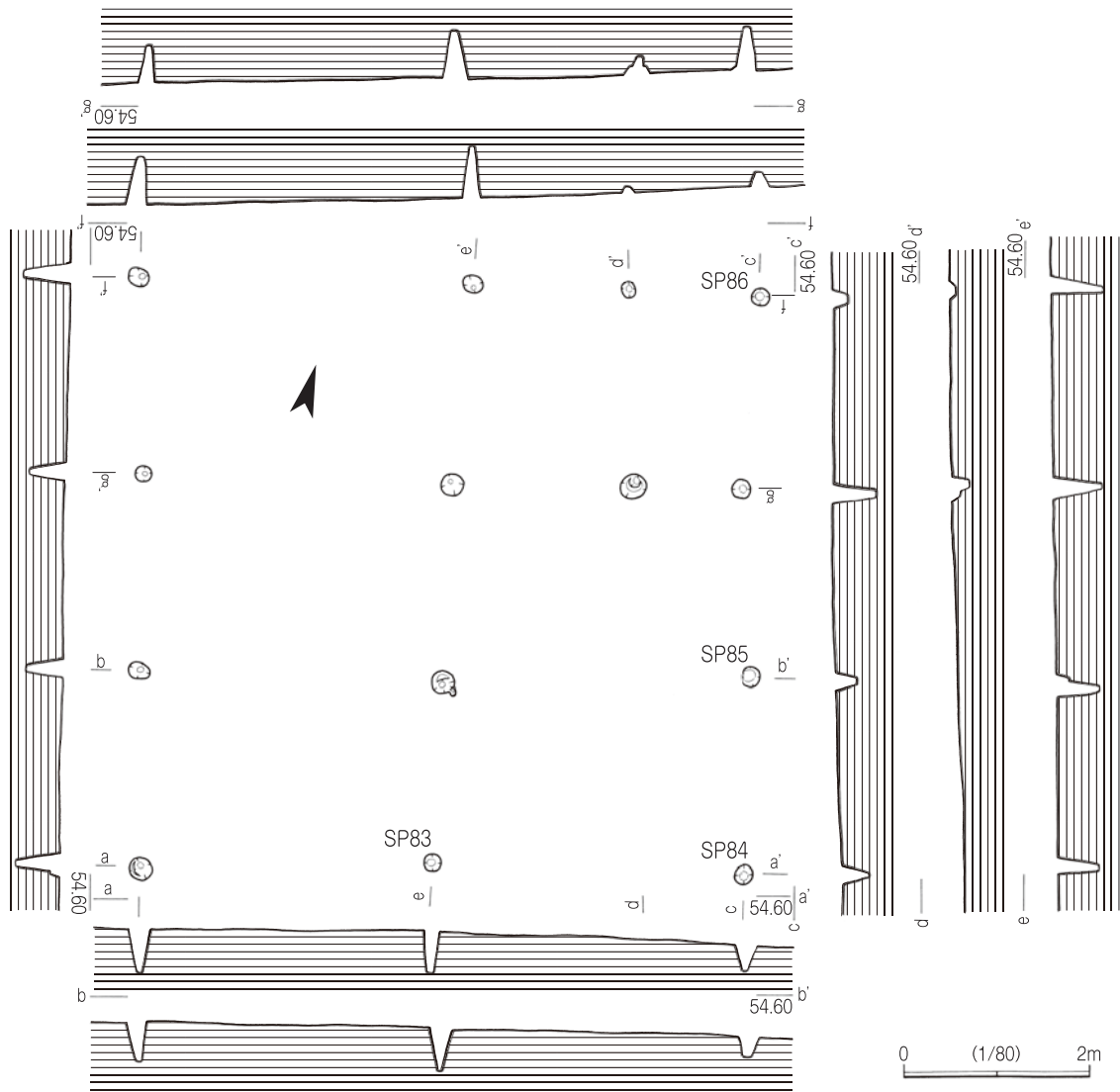


第4図 掘立柱建物跡（SB 1）構成柱穴実測図

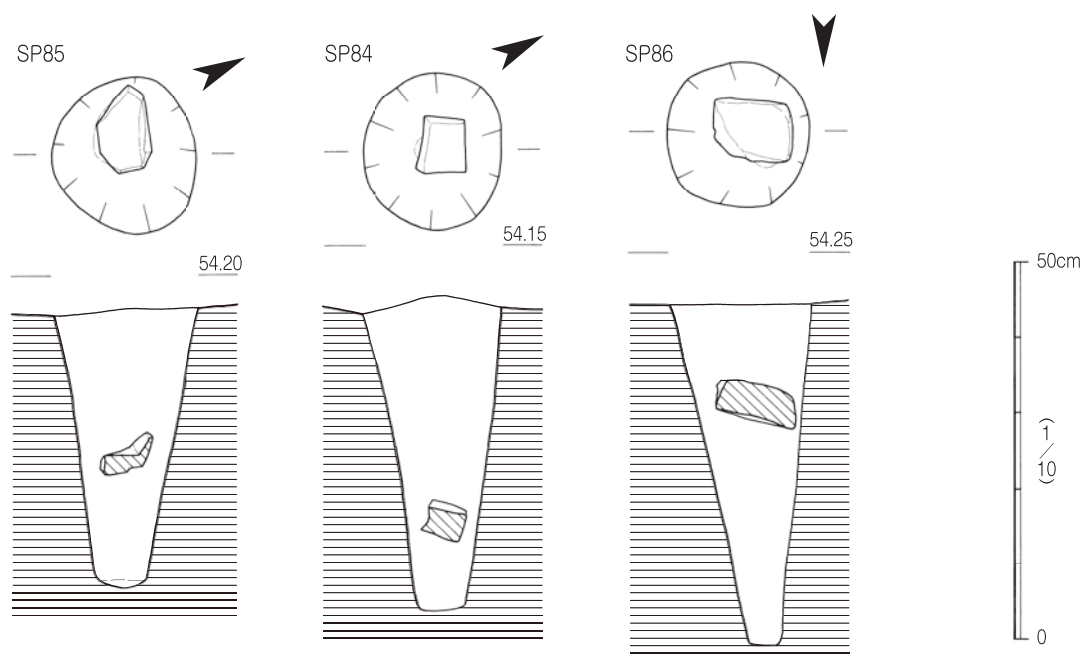


第5図 遺構配置図

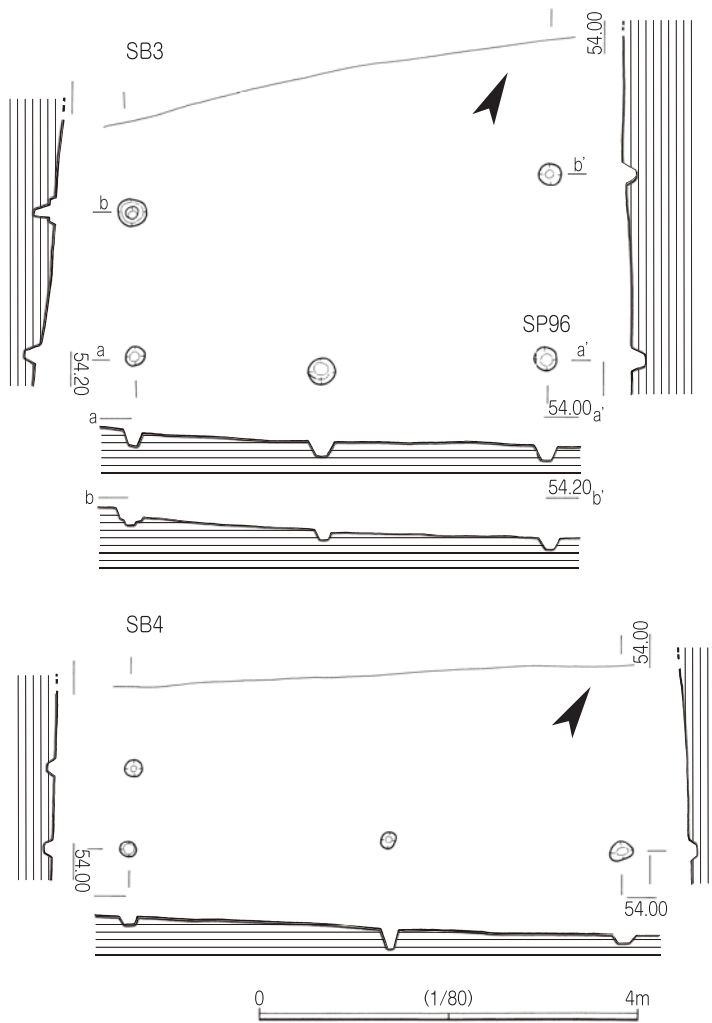




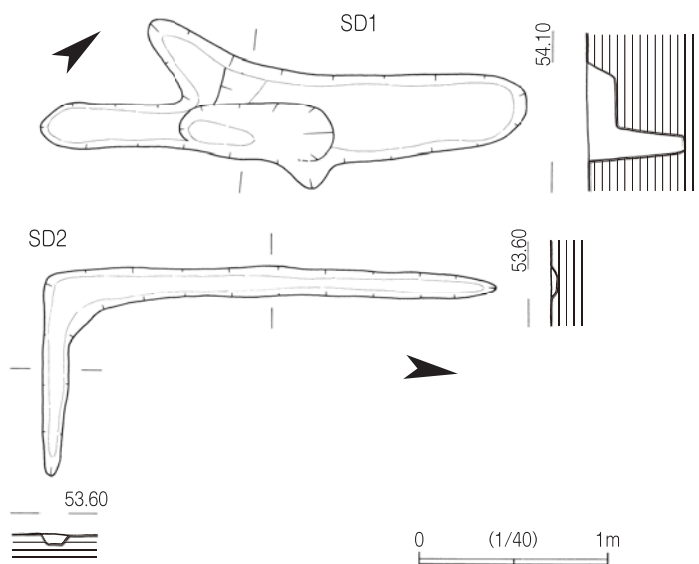
第6図 掘立柱建物跡 (SB 2) 実測図



第7図 掘立柱建物跡 (SB 2) 構成柱穴実測図



第8図 掘立柱建物跡 (SB 3・SB 4) 実測図



第9図 溝実測図

である。建物を構成する柱穴からの出土遺物はなく時期は不明であるが、主軸方位の一致からSB 3と同時期の建物である可能性が高い。

### (2) 溝 (第9図)

調査区中央付近から検出されているが、主軸方位も異なり、いずれも時期や用途は不明である。

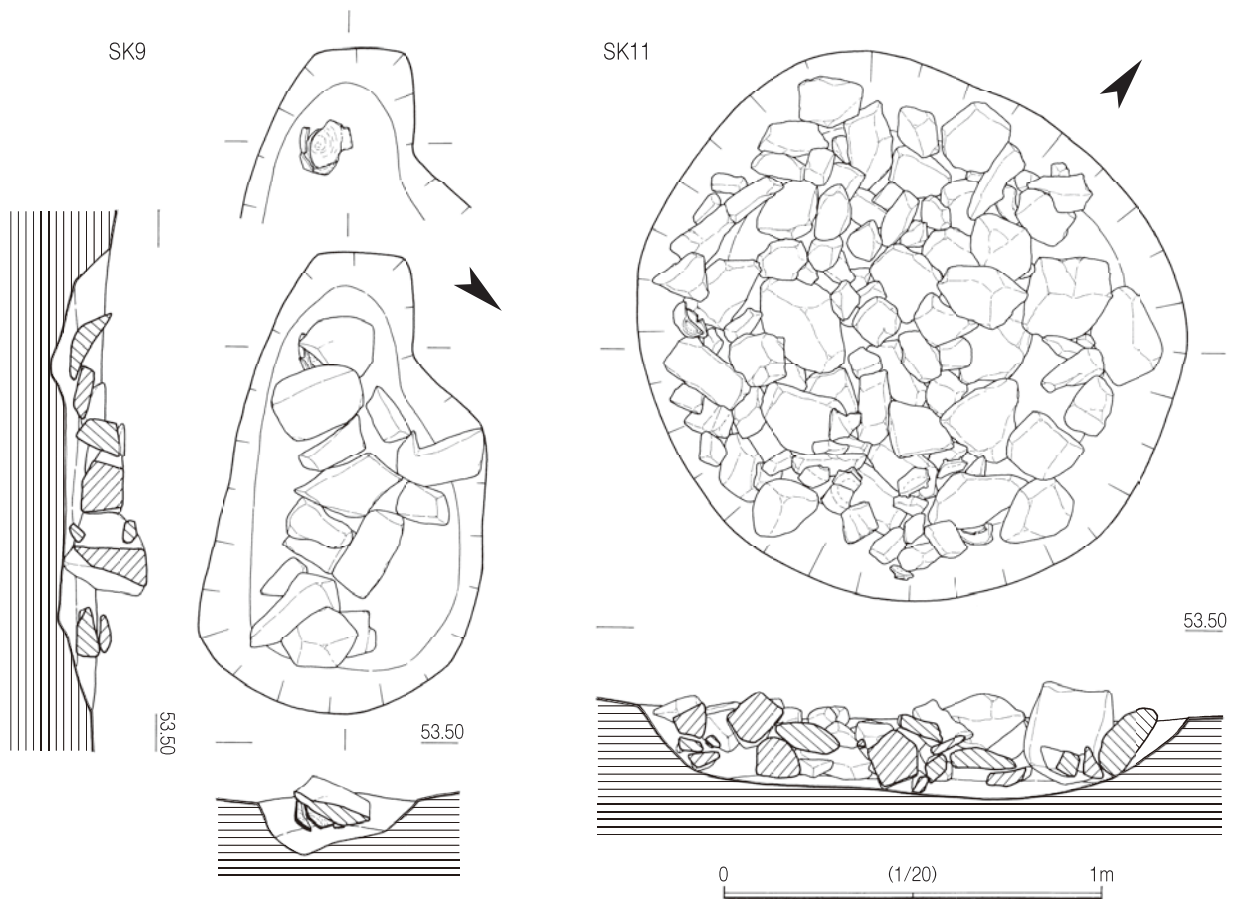
SD 1 長さ2.6 m、最大幅0.5 mのY字状を呈する溝である。深さは10～15cmで、中央付近は一段深く、最深部の深さは50cmである。2条の溝が切り合っている可能性もあるが、土層観察では確認できなかった。埋土上層から縄文土器片が出土している。

SD 2 南北2.4 m、東西1.1 mのL字状を呈する溝で、最深部の深さは6 cmである。ほぼ国土座標の東西・南北に方向が一致する。竪穴建物の周溝である可能性を考慮したが、遺物は出土せず、付近に柱穴もみられなかったため、時期・性格とも不明である。

### (3) 土坑

18基の土坑が検出されたが、埋土に遺物を含まないものが大半であり、建物に関連するものや計画的に配置されたものは確認できない。以下、主なものについて紹介する。

SK 9 (第10図、図版9) 長さ122cm、最大幅72cm、最深部の深さ15cmで、土坑底に人頭大の礫が据えられていた。土坑底西端付近において、礫の下位から土師器杯2点(第14図)が重なった状態で出土し



第10図 土坑実測図（1）

た。これら土師器杯はほぼ同規格であり、14世紀代のものとみられる。

SK11（第10図、図版10）直径約140cm、最深部の深さ22cmの浅い皿状の土坑に、拳大ないし人頭大の礫が充填されていた。礫に伴って出土した近世陶磁器の多くは小破片であり、投棄されたものとみられる。陶磁器は18世紀中葉ないし後葉のものを含み、肥前磁器広東碗（第15図 22）の存在から18世紀末の遺構と考えられる。

SK17（第11図）一辺約50cmの隅丸三角形を呈し、最深部の深さ21cmの近世土坑である。埋土中から18世紀中葉の備前焼播鉢（第15図 28）と滑石製石鍋再加工品（第13図 17）が出土した。後者は中世遺物の混入とみられる。

SK 3（第11図）長径88cm、短径40cm、最深部深さ14cmの長円形土坑である。白磁碗片（第13図 15）が出土し、12世紀の遺構と考えられる。

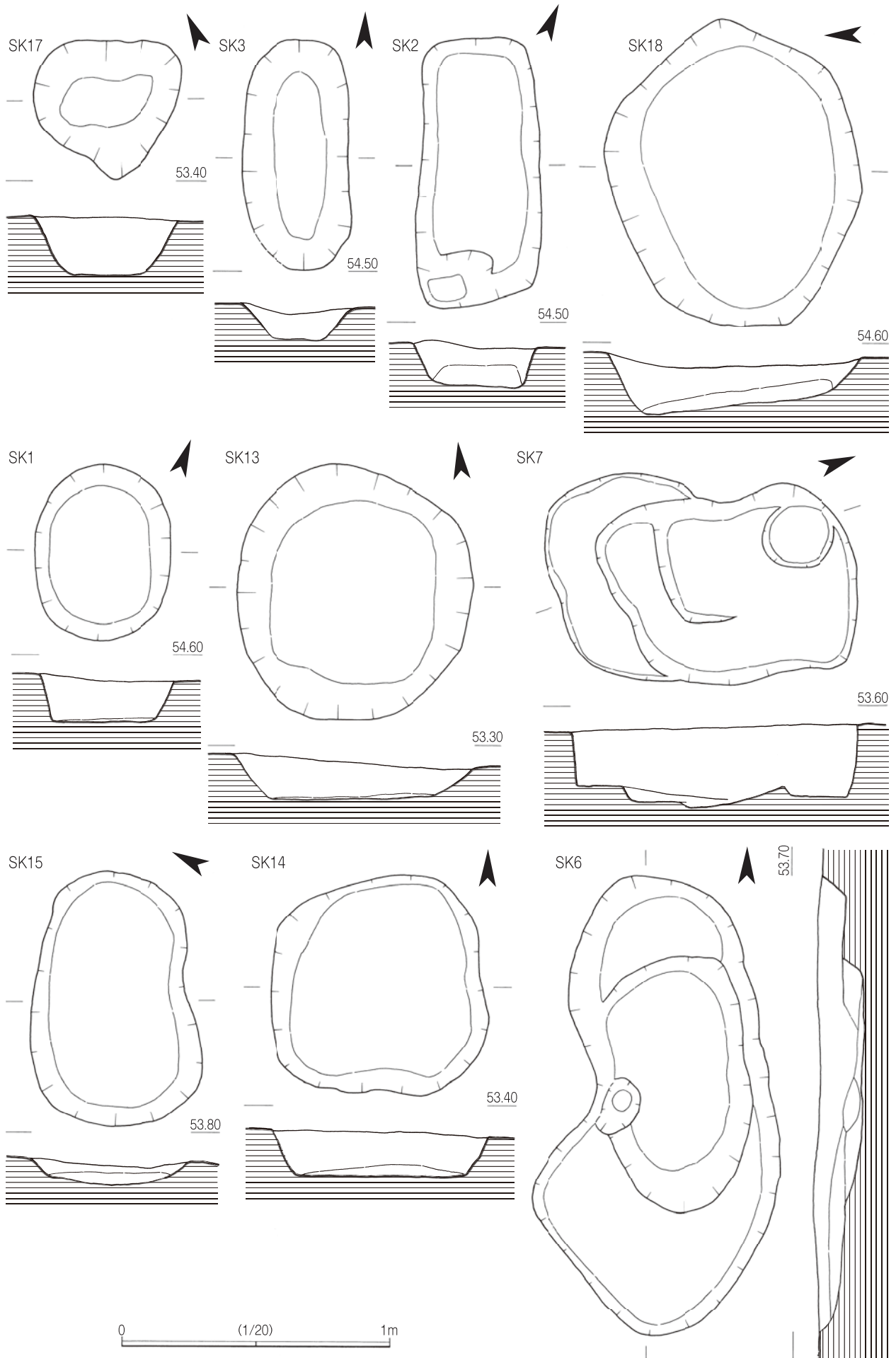
その他の土坑（第11図、第1表）

上記以外の土坑は埋土に遺物を含まず、時期も特定できないため、主なもののみ実測図・計測値を紹介する。

第1表 その他の土坑計測表

（単位はcm、第11図に対応）

遺構名	長軸	短軸	最深部深さ
SK 1	66	50	18
SK 2	102	46	14
SK 6	170	92	18
SK 7	118	78	30
SK13	96	88	16
SK14	80	80	18
SK15	96	62	10
SK18	112	96	26



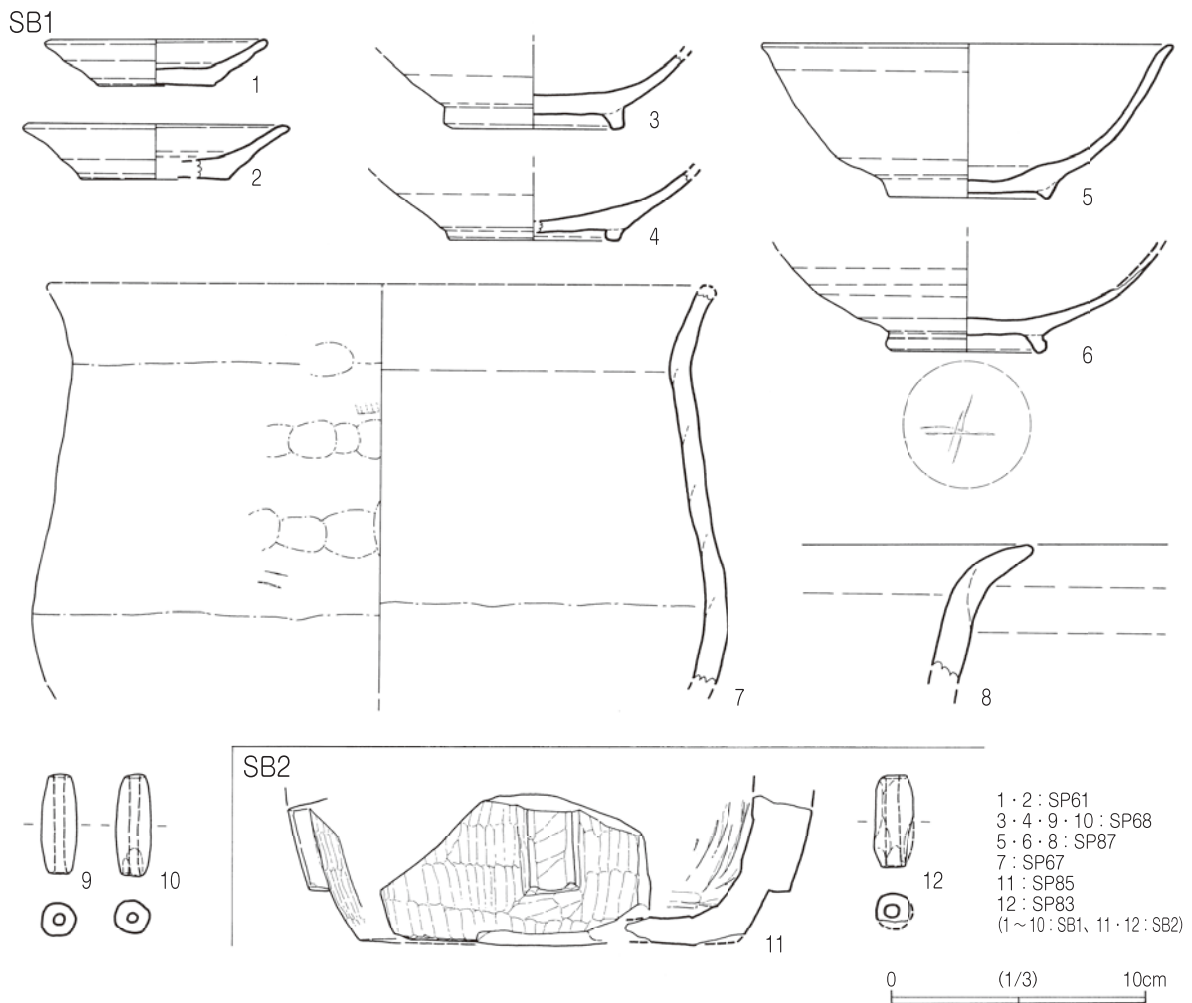
第 11 图 土坑夷测图 (2)

## 2 遺物

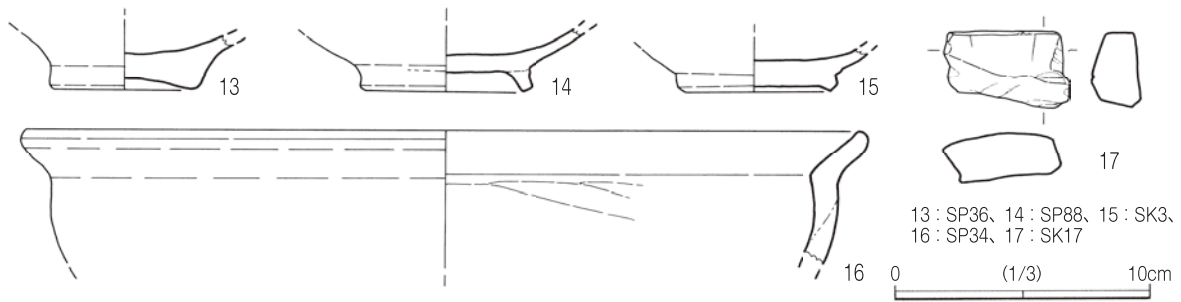
(1) 掘立柱建物に伴う遺物(第12図、図版11) 1~10はSB1を構成する柱穴からの出土遺物である。1・2はSP61出土の土師器皿。3~6は土師器椀で、内面にはミガキの痕跡が確認できる。3・4はSP68、5・6はSP87から出土。6は高台内に焼成後のヘラ記号がある。1~6の底部外面にはいずれも回転糸切り痕が確認できる。7・8は土師器甕。7の体部は外面を指押えおよび粗いナデ、内面をヘラ削りする。8mmを超える厚い器壁と粗い胎土をもつ。7はSP67、8はSP87から出土。9・10はSP68出土の管状土錘である。

SB1は土師器皿・椀の形態・法量等から11世紀後半の年代が推定され、この建物を構成する他の柱穴からの出土遺物もこれに矛盾するものはない。

11・12はSB2を構成する柱穴出土の遺物である。11はSP85から出土した滑石製石鍋で、やや丸みをもつ体部の四方に縦長の瘤状把手の付く形状(石鍋Ⅱ-a類)に復元できる。外面には比較的細かい横方向の工具痕が4段にわたって残る。内面は縦方向に粗い工具痕が残る。体部外面には煤が付着する。なお、石鍋Ⅱ-a類は11世紀前半代を中心とする時期の遺物とされる。12はSP83出土の管状土錘である。



第12図 掘立柱建物跡関連遺物実測図



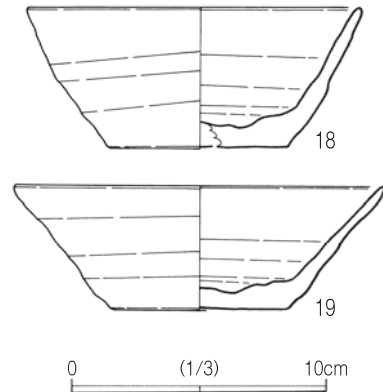
13: SP36、14: SP88、15: SK3、  
16: SP34、17: SK17

第13図 柱穴・土坑出土遺物実測図

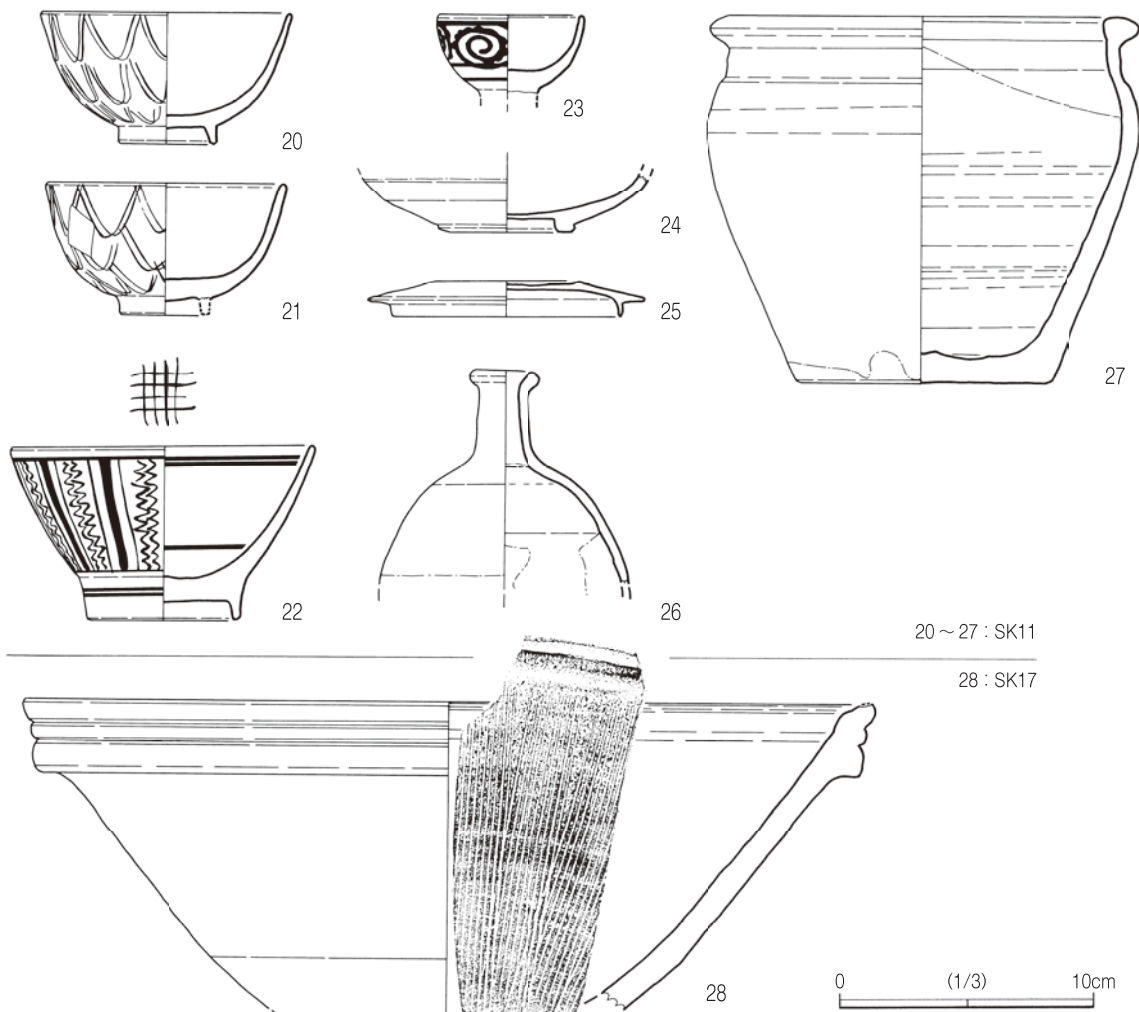
(2) 柱穴および土坑出土遺物(第13～15図、図版11・12)

13はSP36出土の縄文土器底部。14はSP88出土の土師器碗底部で、底部外面には回転糸切り痕が残る。15はSK3出土の白磁碗底部。16はSP34出土の土師器鍋で、体部は外面を粗いナデ、内面をヘラ削りする。17はSK17出土の滑石製石鍋再加工品である。石鍋口縁部をノミによって切断しており、石鍋口縁端部の旧状をとどめる。用途は不明である。

第14図は室町時代土坑(SK9)出土の土師器杯である。



第14図 土坑(SK9)出土遺物実測図



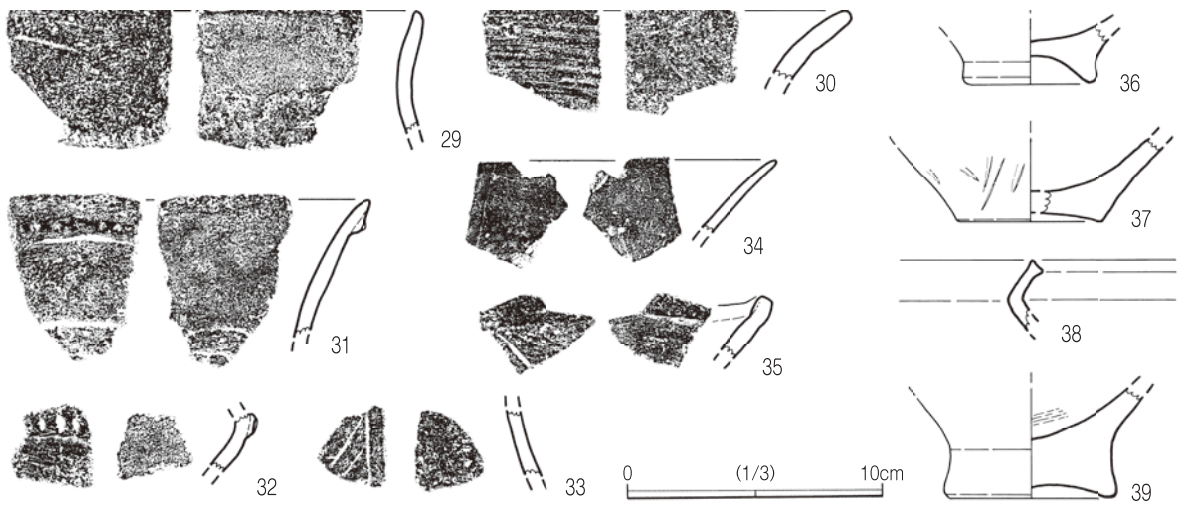
20～27: SK11

28: SK17

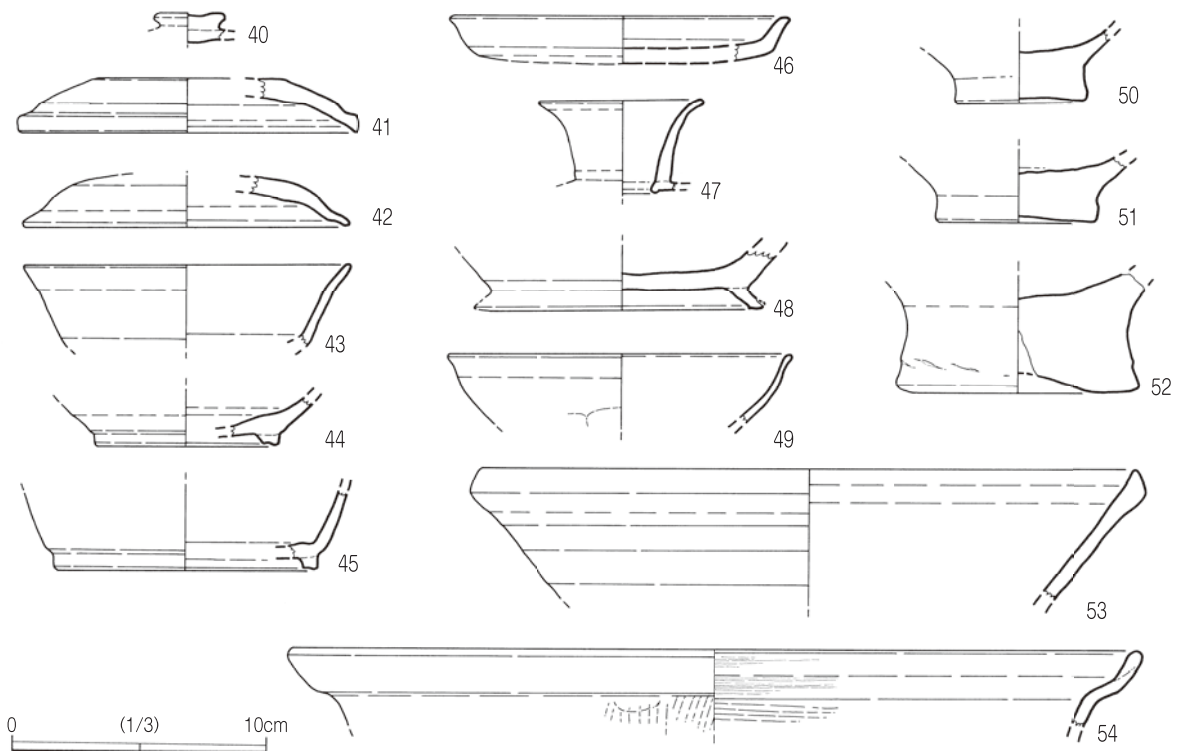
第15図 土坑(SK11・17)出土遺物実測図

2点は伏せて重ねられた状態で出土した。18・19とも胎土に雲母粒を多く含み、ロクロ成形に伴う螺旋状の器壁の凹凸が明瞭に残る。形態・法量等から、14世紀代の遺物と考えられる。

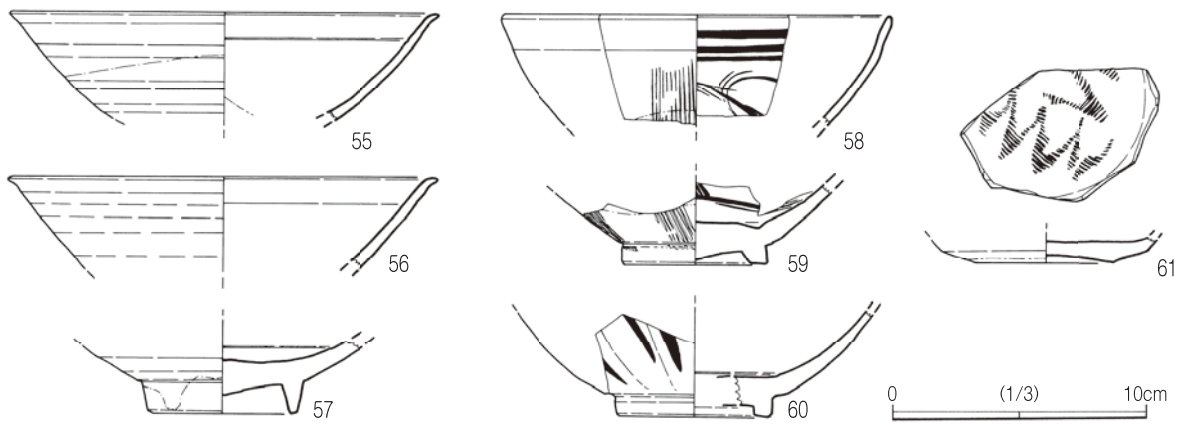
第15図は土坑出土の近世遺物である。20～27はSK11からの出土遺物である。20～22は肥前磁器白磁染付碗。20・21は2重網目文の半球碗。22は広東碗で、見込に格子状の文様を染付ける。23は白磁染付仏飯器。24は陶器椀。黒色の鉄釉を施し、体部下半以下を露胎とする。25は陶器蓋。摘みをもたず、上面に透明釉を施す。26は陶器瓶。外面～頸部内面に黒色の鉄釉を施す。27は陶器甕。外面および口縁部内面に暗赤褐色の鉄釉を施す。なお、SK11出土の肥前磁器は18世紀中葉から後葉にかけての時期幅が認められる。



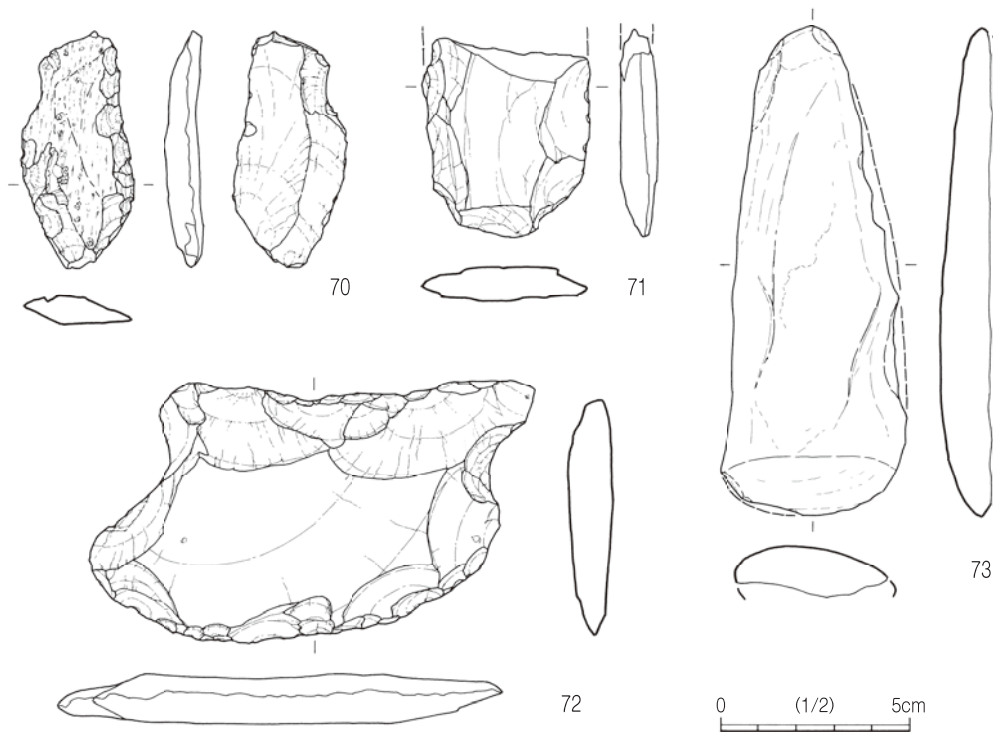
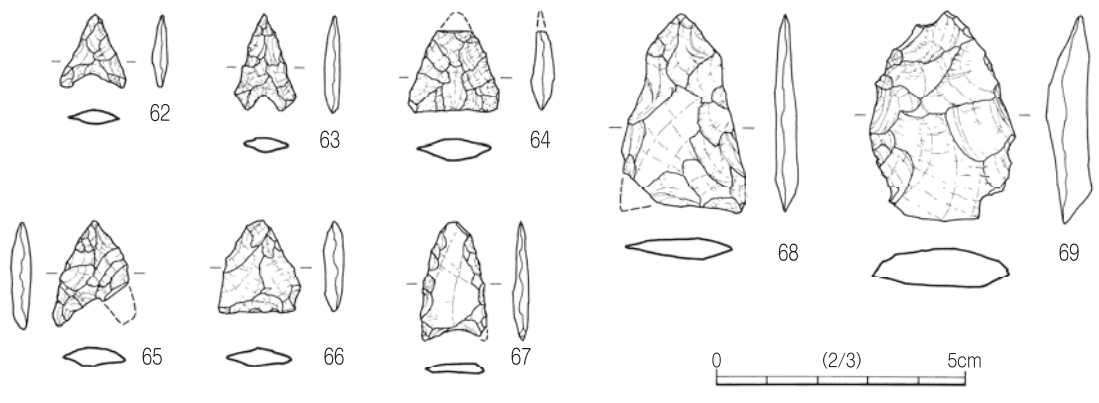
第16図 遺構に伴わない遺物実測図(1) 縄文時代～弥生時代の土器



第17図 遺構に伴わない遺物実測図(2) 古代～中世の土器



第 18 図 遺構に伴わない遺物実測図 (3) 中国製磁器



第 19 図 遺構に伴わない遺物実測図 (4) 縄文時代の石器



28はSK17から出土した無釉の陶器播鉢（備前焼）であり、18世紀中葉の遺物である。

（3）遺構に伴わない遺物（第16～21図、図版12～14） 遺構検出時に遺物包含層から出土した遺物で、縄文時代から中世にかけてのものを含む。29～37は縄文晩期土器である。29～33は深鉢、34・35は浅鉢である。31・32は刻目突帯を貼付ける。33は口縁部外面に沈線文を施す。35は口縁端部に突起をもち、外面に疑似縄文および沈線文がみられる。36・37は縄文土器深鉢底部である。

38・39は弥生土器甕であり、中期後半ないし後期前半に比定できる。

40～48は須恵器である。40～42は杯蓋、43～45は杯身、46は皿、47は平瓶口縁部、48は長頸壺底部であり、8世紀後半～9世紀前半に比定される。49は和泉型瓦器碗である。不明瞭ながら、内外面に暗文がみられる。50～52は土師器台付皿底部である。53は東播系須恵器鉢である。54は土師器鍋である。

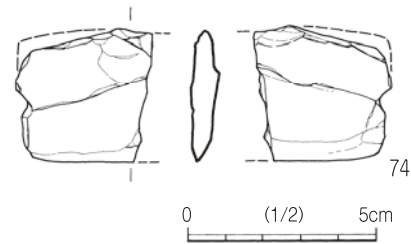
55～61は中国製磁器である。55～57は白磁碗、58～60は青磁碗、61は青磁皿である。58・59は内面に劃花文、外面に櫛描文をもつ。60は外面に鎬蓮弁文をもつ。61は見込に櫛描文をもつ。

62～65は打製石鏃、66～69は打製石鏃未製品である。石材は65は姫島産黒曜石であり、他は安山岩である。70は縦長剥片素材の安山岩製石匙である。片面には自然面を多く残す。71は塩基性片岩製打製石斧で、折損する。72は横長剥片素材の安山岩製スクレイパーであり、使用痕・装着痕は明確ではない。73は泥岩製磨製石斧で、片面が剥離する。

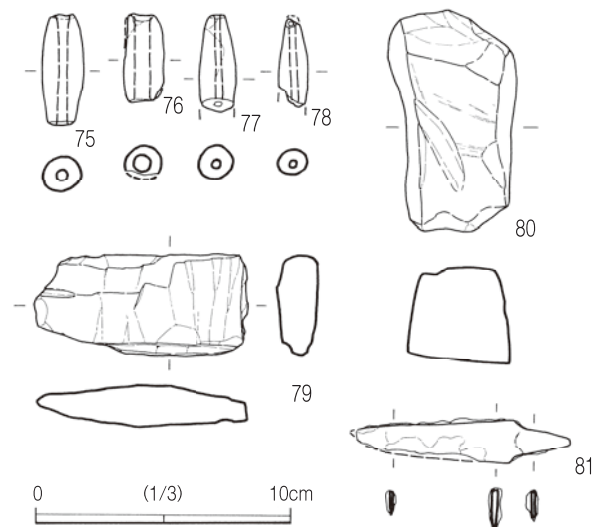
74は泥質片岩製石庖丁である。刃部のみ研磨し、端部に抉りをもつ。穿孔の痕跡はみられない。

75～78は管状土錘であり、76は表面の一部が剥離し、77・78は折損する。79は滑石製石鍋再加工品であり、石鍋口縁部から鏝部にかけてを利用する。用途は不明である。80は砂岩製砥石で、折損する。81は鉄刀子である。

なお、遺構検出中にスラグ数点が出土している（図版14 82・83）。



第20図 遺構に伴わない遺物実測図（5）  
弥生時代の石器



第21図 遺構に伴わない遺物実測図（6）  
その他の遺物

第2表 出土遺物計測表（1） 土器類

遺物番号	名称	法量 (cm)			備考	遺物番号	名称	法量 (cm)			備考
		口径	器高	底径				口径	器高	底径	
1	土師器 皿	△ 8.4	1.8	4.6	SP61 (SB 1) 出土	34	縄文土器 浅鉢				遺物包含層出土
2	土師器 皿	△ 10.0	2.2	△ 6.0	SP61 (SB 1) 出土	35	縄文土器 浅鉢				遺物包含層出土
3	土師器 椀			7.1	SP68 (SB 1) 出土	36	縄文土器 深鉢			4.6	遺物包含層出土
4	土師器 椀			6.7	SP68 (SB 1) 出土	37	縄文土器 深鉢			△ 5.8	遺物包含層出土
5	土師器 椀	△ 16.0	6.1	6.4	SP87 (SB 1) 出土	38	弥生土器 甕				遺物包含層出土
6	土師器 椀			6.3	SP87 (SB 1) 出土	39	弥生土器 甕			△ 6.3	遺物包含層出土
7	土師器 甕	△ 26.0			SP67 (SB 1) 出土	40	須恵器 杯蓋				遺物包含層出土
8	土師器 甕				SP87 (SB 1) 出土	41	須恵器 杯蓋	△ 13.0			遺物包含層出土
13	縄文土器 深鉢			5.6	SP36 出土	42	須恵器 杯蓋	△ 12.5			遺物包含層出土
14	土師器 椀			6.1	SP88 出土	43	須恵器 杯身	△ 12.8			遺物包含層出土
15	白磁 碗			5.8	SK 3 出土	44	須恵器 杯身			△ 7.1	遺物包含層出土
16	土師器 鍋	△ 32.8			SP34 出土	45	須恵器 杯身			△ 10.1	遺物包含層出土
18	土師器 杯	△ 13.0	5.6	7.0	SK 9 出土	46	須恵器 皿	△ 13.1	△ 1.9	△ 11.4	遺物包含層出土
19	土師器 杯	△ 14.4	4.9	7.0	SK 9 出土	47	須恵器 平瓶	△ 6.9			遺物包含層出土
20	白磁染付 碗	△ 9.7	5.2	3.7	SK11 出土	48	須恵器 長頸壺			△ 10.2	遺物包含層出土
21	白磁染付 碗	△ 9.2	△ 7.3	△ 3.4	SK11 出土	49	瓦器 椀	△ 13.3			遺物包含層出土
22	白磁染付 碗	11.8	7.0	5.8	SK11 出土	50	土師器 台付皿			△ 5.3	遺物包含層出土
23	白磁染付 仏飯器	△ 5.4			SK11 出土	51	土師器 台付皿			△ 6.4	遺物包含層出土
24	陶器 椀			4.3	SK11 出土	52	土師器 台付皿			△ 9.6	遺物包含層出土
25	陶器 蓋	4.9	1.4		外径 11.0、SK11 出土	53	須恵器 鉢	△ 25.7			遺物包含層出土
26	陶器 瓶	2.2			SK11 出土	54	土師器 鍋	△ 33.0			遺物包含層出土
27	陶器 甕	△ 14.2	14.5	9.8	SK11 出土	55	白磁 碗	△ 16.6			遺物包含層出土
28	陶器 掃鉢	△ 32.6			SK17 出土	56	白磁 碗	△ 16.5			遺物包含層出土
29	縄文土器 深鉢				遺物包含層出土	57	白磁 碗			△ 5.6	遺物包含層出土
30	縄文土器 深鉢				遺物包含層出土	58	青磁 碗	△ 15.1			遺物包含層出土
31	縄文土器 深鉢				遺物包含層出土	59	青磁 碗			△ 5.5	遺物包含層出土
32	縄文土器 深鉢				遺物包含層出土	60	青磁 碗			△ 5.7	遺物包含層出土
33	縄文土器 深鉢				遺物包含層出土	61	青磁 皿			5.3	遺物包含層出土

(数値の単位はcm)

△は推定値

第3表 出土遺物計測表（2） その他の遺物

遺物番号	名称	法量 (cm)			重さ (g)	備考 (数値の単位はcm)
		長さ	幅	厚さ		
9	土師質 土錘	4.0			6.3	最大径 1.5、最小口径 0.35、SP68 (SB 1) 出土
10	土師質 土錘	4.0			7.3	最大径 1.4、最小口径 0.35、SP68 (SB 1) 出土
11	石鍋					底径 (推定) 14.8、SP85 (SB 2) 出土
12	土師質 土錘	3.7				最大径 1.5、最小口径 0.55、SP83 (SB 2) 出土
17	石鍋再加工品	3.0	4.4	2.0	47.9	SK17 出土
62	石鎌	1.4	1.3	0.3	0.2	遺物包含層出土
63	石鎌	1.9	1.2	0.7	0.4	遺物包含層出土
64	石鎌	△ 1.6	1.8	0.4	△ 1.2	遺物包含層出土
65	石鎌	2.1	△ 1.5	0.4	△ 0.8	遺物包含層出土
66	石鎌未製品	1.8	1.6	0.3	0.9	遺物包含層出土
67	石鎌未製品	2.4	1.3	0.3	0.8	遺物包含層出土
68	石鎌未製品	4.0	2.4	0.5	4.0	遺物包含層出土
69	石鎌未製品	4.1	2.9	0.8	10.3	遺物包含層出土
70	石匙	6.2	2.9	1.9	15.1	遺物包含層出土
71	打製石斧	△ 5.3	4.5	1.0		遺物包含層出土
72	スクレイパー	6.8	11.8	1.3	134.4	遺物包含層出土
73	磨製石斧	13.0	4.0	1.3		遺物包含層出土
74	石庖丁	△ 3.6	3.5	0.7		遺物包含層出土
75	土師質 土錘	3.7			9.8	遺物包含層出土
76	土師質 土錘	3.5				最大径 1.5、最小口径 0.6 遺物包含層出土
77	土師質 土錘	△ 3.8				最大径 1.6、最小口径 0.25 遺物包含層出土
78	土師質 土錘	△ 3.5				最大径 1.2、最小口径 0.25 遺物包含層出土
79	石鍋再加工品	4.0	8.4	1.7	83.7	遺物包含層出土
80	砥石	△ 8.8	4.9	3.9		遺物包含層出土
81	鉄刀子	△ 8.4	6.4	0.3		刃部長△ 6.4 遺物包含層出土
82	スラグ				約 220	遺物包含層出土
83	スラグ				約 37	遺物包含層出土

△は残存値

## IV まとめ

まず、西土生遺跡の調査成果から、近世以前のこの地点の土地利用状況を整理する。

縄文時代晩期～弥生時代後期 居住の痕跡はみられないものの、縄文時代には打製石鏃に加えて打製石斧や収穫具の可能性のあるスクレイパーがみられることから、この台地で狩猟とともに農耕が行われた可能性がある。弥生時代には石庖丁が出土しており、この台地ないし周辺の低地で稲作が行われたと考えられる。

古墳時代 遺構・遺物とも確認できない。

奈良時代～平安時代前半 須恵器片が比較的多く出土するものの、遺構は確認できない。

平安時代後半（11世紀） 遺跡の中心時期であり、柱穴多数とともに四面廂建物を含む2棟の大型建物（SB 1・2）が確認できる。また、小規模建物であるSB 3・4もこの時期の遺構である可能性がある。

平安時代末期～室町時代前期 輸入磁器が比較的まとまって出土しているものの、この時期の遺構は土坑2基（SK 3・9）のみである。この時期にはソバを栽培していた可能性がある（付編参照）。

室町時代後期～江戸時代前期 遺構・遺物とも確認できない。

江戸時代中期 ゴミ穴とみられる土坑（SK11・17）が存在するため、付近に住居等が存在する可能性がある。

次に、西土生遺跡における特徴的遺構・遺物について検討する。

四面廂建物および付属棟（SB 1・2） 平安時代後半の明確な四面廂建物は、県内では周防国府跡 98次 SB6460、秋根遺跡 LB100を類例に挙げることができる。両者はいずれも身舎が桁行5間、梁行2間の規模をもつ官衙関連の遺構であり、身舎が桁行3間、梁行2間の規模である西土生遺跡 SB 1とは様相を異にする。立地条件を勘案すれば西土生遺跡は官衙遺跡とは考えられず、これらと同列に論ずることは適当ではない。一方、四面廂建物は荘園遺跡の中心的建物の型式でもあることから、むしろ西土生遺跡については荘園との関連で理解するべきであろう。



第22図 西土生遺跡と周辺地形

SB 1の付属棟と考えられるSB 2は、構成柱穴の直径がSB 1の3分の2程度であることから、軽量または簡易な上部構造をもつ建物であったとみることができる。また、柱の細さに比して柱間が広いことから、倉庫とは考えにくい。

滑石製石鍋（第12図11、図版11） 本遺跡で発見された石鍋はⅡ-a類であり、11世紀前半の遺物と判断される。滑石製石鍋Ⅱ類の出土は県内では8遺跡目であり、筏石遺跡、長門国府跡金屋地区遺構面B面、秋根遺跡P-XVI・P・14、上嘉川遺跡ため池、周防国府跡、切畑南遺跡4地区SP11、大崎遺跡（木船地区）遺物包含層でも出土している。石鍋Ⅱ-a類は官衙関連遺跡から出土することが多く、西土生遺跡に官人に準じる身分の人物が居住していた可能性が高い。

土錘（第12図9・10・12、図版11） SB 1・2を構成する柱穴ほかから管状土錘が出土しており、居住者の漁業との関わりが想定される。遺跡の眼前を流れる錦川支流の竹安川は幅も狭く水深も浅いことから網漁は想定しにくい。本遺跡北方、直線距離で最短約500mの地点を流れる錦川本流で操業したとみられる。このことは、この地区の居住者が日常的に錦川本流地域との関わりをもっていたことを意味する。錦川が昭和初期まで岩国地域の物流の幹線であったことを考え合わせるなら、河口から約14kmの地点に住む彼らも瀬戸内海、さらには畿内と無縁であったとは限らない。

和泉型瓦器椀（第17図49、図版13） 体部上半～口縁部の破片であるが、口縁端部内面側に沈線や段をもたないこと、器壁が薄く暗文が粗いことからⅡ-3期ないしⅢ-1期の和泉型瓦器椀とみられる。12世紀後半に比定され、畿内からの人の移動を想定させる遺物である。

以上のことから岩国市土生地区には11世紀後半に荘園が存在したとみることができ、少なくとも12世紀後半にはこの地区が畿内との関わりを持っていたことも明らかになった。

なお、真木隆行氏（山口大学人文学部准教授）によれば、土生地区周辺には「竹安」・「行正」等、名に関わる可能性のある地名がみられることから、この地に荘官もしくは郡郷司刀禰層の屋敷があったとしても不自然ではない。このあたりは、中世には山代庄に含まれる地域と考えられるが、文献で当庄の存在を確認できるのは12世紀中葉以降であり、立庄時期がどれほど遡るかを含めて不明な点が多い。山代庄の前身としては、康平6年（1063）の岩国市美和町茶湯原出土鉄札銘にみえる「山代郷」が参考になる。これは10世紀の『和名類聚抄』にみえない郷名であることから、それ以降の新興の国衙領と考えられる。この山代郷に土生地区が含まれていたか否かは定かでないが、この段階の郡郷司刀禰層が中央と何らかのつながりを有したとしても不思議ではない。いずれにしても11世紀～12世紀は全国的な再開発の時期にあたり、別名・便補保や荘園が各地で激増することから考えると、11世紀後半に西土生遺跡SB 1・2が出現することは、これらの動きを反映している可能性もある。文献による検証には限界があるものの、西土生遺跡SB 1・2を山代庄もしくはその前身所領（国衙領など）に関連する施設とみることには妥当性があり、全国的な視点からも注目に値する、とのご教示をいただいた。

#### 〔参考文献〕

宇野隆夫『荘園の考古学』（シリーズ 日本史の中の考古学）青木書店 2001年  
木戸雅寿「13. 石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995年  
橋本久和「第3章 瓦器椀編年の今日」『中世考古学と地域・流通』（有）真陽社 2009年

## (付編)

# 西土生遺跡発掘調査に係る花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

西土生遺跡は岩国市内陸部の沖積段丘上に立地する。発掘調査の結果、平安時代集落跡とみられる大型建物のほか、縄文～江戸時代の土器・石器・陶磁器等が確認されている。今回の分析調査では、縄文時代以前、縄文時代～古代、12～13世紀、11世紀の堆積物を対象として花粉分析を実施し、各時期の古植生に関する情報を得る。

## 1. 試料

分析試料は、図1に示す地点より採取された試料1～12までの12点である(表1)。各試料の詳細を表1に示す。試料の層相は、全体的に細礫・小礫混じりの砂質シルト～粘土で、淘汰が悪い土壤からなる。色調は遺物包含層や遺構覆土では、黒褐色やオリーブ黒色を呈しており、色調が暗く、土壤生成が進行した堆積物からなるが、遺構面基盤層(いわゆる地山)では黄灰色や暗褐色で、

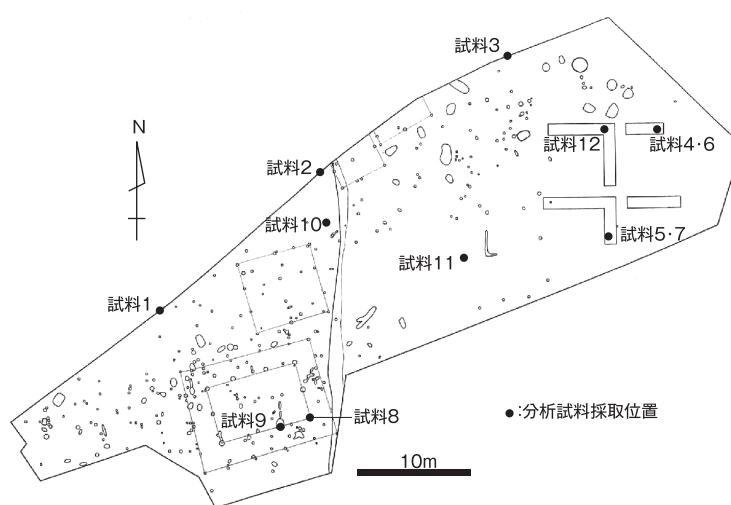


図1 分析試料採取位置

表1 分析試料一覧

試料番号	時代性など	層相
1	12～13世紀の遺物包含層	2.5Y 3/2 黒褐を呈する、やや腐植を含む淘汰の悪い細礫～粗粒砂混じりシルト質中粒～細粒砂からなる。著しく擾乱されている。土壤生成が進行。炭化材片混じる。
2	12～13世紀の遺物包含層	2.5Y 3/2～3/3 黒褐～暗オリーブ褐を呈する、やや腐植を含む淘汰の悪い細粒～極細粒砂質シルトからなる。著しく擾乱されている。土壤生成が進行。
3	12～13世紀の遺物包含層	2.5Y 3/2～3/3 黒褐～暗オリーブ褐、やや腐植を含む淘汰の悪い細粒～極細粒砂質シルトからなる。著しく擾乱されている。土壤生成が進行。
4	緩斜面堆積物上層(縄文時代～古代)	2.5Y 3/2～4/2 黒褐～暗灰黄、やや腐植を含む淘汰の悪い細粒～極細粒砂質シルトからなる。著しく擾乱されている。土壤生成が進行。
5	緩斜面堆積物上層(縄文時代～古代)	2.5Y 3/2～4/2 黒褐～暗灰黄、やや腐植を含む淘汰の悪い細粒～極細粒砂質シルトからなる。著しく擾乱されている。土壤生成が進行。
6	緩斜面堆積物下層(縄文時代～古代)	2.5Y 3/2～4/2 黒褐～暗灰黄、やや腐植を含む淘汰の悪い小礫～粗粒砂混じりシルト質細粒～極細粒砂からなる。著しく擾乱されている。土壤生成が進行。
7	緩斜面堆積物下層(縄文時代～古代)	2.5Y 3/2～4/2 黒褐～暗灰黄、やや腐植を含む淘汰の悪い細礫混じりシルト質極細粒砂から細粒砂からなる。著しく擾乱されている。土壤生成が進行。
8	SB 1 柱穴埋土(11世紀)	7.5Y 3/2 オリーブ黒、やや腐植を含む淘汰の悪い極細粒～細粒砂質シルトからなる2.5mm程度の偽礫ないし集合体からなる。
9	SB 1 柱穴埋土(11世紀)	7.5Y 3/2 オリーブ黒、やや腐植を含む淘汰の悪い極細粒～細粒砂質シルトからなる2.5mm程度の偽礫ないし集合体からなる。
10	遺構面基盤層(縄文時代以前)	2.5Y 5/3 黄褐、淘汰の悪い極細粒～細粒砂質シルト。生物擾乱の痕跡あり。
11	遺構面基盤層(縄文時代以前)	2.5Y 4/4 オリーブ褐、淘汰の悪い極細粒～細粒砂質シルト。生物擾乱の痕跡あり
12	遺構面基盤層(縄文時代以前)	2.5Y 5/3 黄褐、淘汰の悪い細礫混じりシルト質極細粒砂。生物擾乱の痕跡あり

包含層に比べて色調がやや明るく、土壌生成の進行の程度は小さい。

## 2. 分析方法

試料約 10 g について、フッ化水素酸による泥化、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25 mm の篩による篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、島倉（1973）、中村（1980）等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

## 3. 結果

結果を表 2 に、プレパラート内の花粉や孢子などの産出状況を図版 1 に示す。

分析処理後の残渣はいずれの試料も少なく、プレパラート 1～2 枚作れる程度であるため、ほぼ全ての残渣を検鏡に用いた。その結果、花粉化石はほとんど検出されず、検出されても図版に示すように保存状態が悪い。試料 1 でソバ属、試料 6・7・8 でマツ属、試料 7 でイネ科が検出されるなど、各試料で 0～2 個検出される程度である。シダ類孢子は、試料 1・4・6 など多産するが分析処理量を考えると含量密度は著しく低い。

なお、分析処理後の残渣は、フッ化水素酸処理で溶け残った鉱物粒を除けば、ほとんどが微粒炭からなる。微粒炭は、黒ボク土中に多く見られる細長く割れ口がシャープな微粒炭（山野井，1996）は少ない。今回みられる微粒炭は、薄いものでは光量を通常より大きくすると少量の光を通す。大型のものの一部には、木本由来とみられる放射組織や壁孔、導管の一部がみられる。これらは典型的な微粒炭とはいえないが、通常光で光を通しにくく、表面光沢もあることから微粒炭の範疇に入れた。組織が比較的残っていることから、火熱の程度が小さかった可能性もある。

表 2 花粉分析結果

種 類	試料番号											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
木本花粉												
トウヒ属	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-
草本花粉												
イネ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ユリ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キク亜科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シダ類孢子												
イノモトソウ属	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
他のシダ類孢子	195	28	-	154	16	338	73	84	4	4	9	-
合 計												
木本花粉	0	2	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0
草本花粉	2	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
シダ類孢子	195	28	0	154	16	338	74	85	4	4	9	0
合計（不明を除く）	197	30	1	154	16	339	76	86	4	4	9	0

## 4. 考察

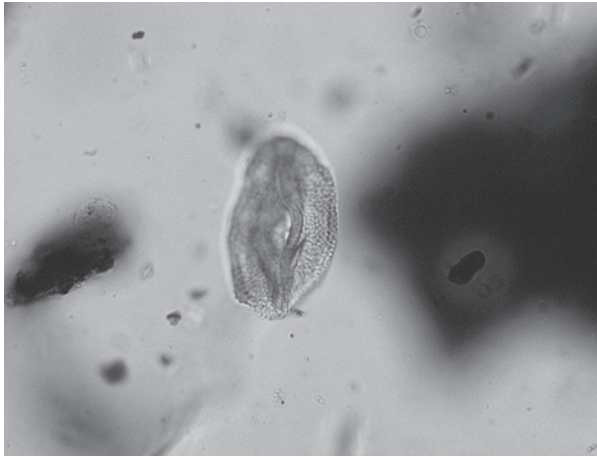
今回調査を実施した堆積物試料は、いずれの試料も花粉化石の検出数が少なく、産出する化石の保存状態が悪かった。先述したように、調査試料はいずれも土壤生成作用の影響を受けている堆積物からなる。花粉化石は、土壤生成が進行するような好気的環境下の堆積物では科学的・生物的・物理的な風化作用の影響により分解・消失することが知られており（中村, 1967 など）、今回の場合も風化作用によって分解・消失したものと判断される。花粉・胞子の風化に対する抵抗力は、花粉・胞子中の外壁中に含まれているスポロポレニンの量にほぼ一致し（Havinga, 1964）、花粉に比較してスポロポレニンの量が多いとされるシダ類胞子は風化作用の影響を受けても化石として残りやすい（Brooks & Shaw, 1971）。今回の試料でも花粉化石は少ないが、シダ類胞子が多産する試料が散見されており、風化に対する抵抗力の違いに起因する産状といえる。また、分析後の残渣は非常に少なく、残渣のほとんどが微粒炭であったが。これは、好気的環境下により、分解されにくい微粒炭のみが残存したためと考えられる。さらに、産出したイネ科やマツ属花粉は図版に示したように保存状態が悪くても形が特徴的であるため、同定が可能な種類である。これらのことから、今回の試料中の花粉・胞子化石群集は風化作用により偏った組成となっていると判断される。そのため、当時の植生を推定することは困難であるが、僅かに産出した種類は各層準形成期の調査地点周辺に生育していた植物に由来するものと思われる。なお、12～13世紀の堆積物からは保存は悪いがソバ属が検出されている。当該期の調査区周辺においてソバ栽培が行われていた可能性がある。

山口県の瀬戸内海沿岸地域の遺跡発掘に伴う花粉分析成果をみると、山口市吉田遺跡では、縄文時代以降に周辺山地などにアカガシ亜属やシイノキ属など常緑広葉樹林が存在したことが推定されている（野井, 1989）。また、沿岸部に位置する上関町の田ノ浦遺跡でも縄文時代～古墳時代にかけて背後山地にシイ・カシ類からなる常緑広葉樹林が存在したことが推定されている（加速器分析研究所, 2011）。これらの結果と、三好（1998）による瀬戸内海沿岸地域の古植生に関する調査結果などを考え合わせると、本遺跡周辺も人為的攪乱を受ける以前には、暖温帯性常緑広葉樹林が存在したものと思われるが、この点については、今後、低地堆積物を対象とする古植物学的調査により検証していくことが大切と考える。

### 引用文献

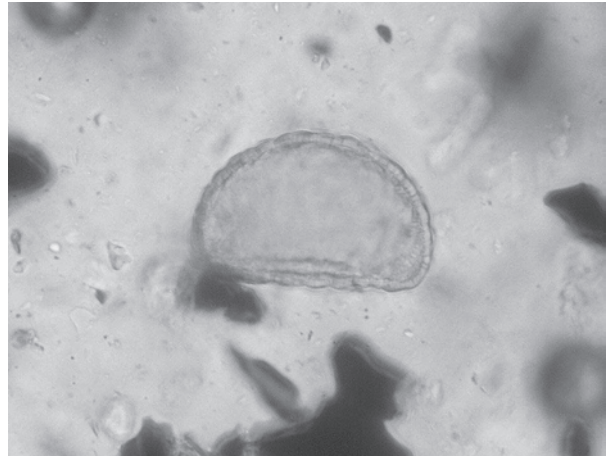
- Brooks, J. & Shaw, G. 1971. Recent developments in the chemistry, biochemistry, geochemistry and post-tetradontogeny of sporopollenins derived from pollen and spore exines. "Pollen: Development and Physiology" (ed. Heslop-Harrison, J.) 99-114. Butterworths, London.
- Havinga, A. J. 1964. Investigation into the differential corrosion susceptibility of pollen and spores. *Pollen et Spores*, 6: 621-635.
- 三好 教夫, 1998, 中国・四国地方の植生史. 図説 日本列島植生史, 安田 喜憲・三好 教夫編, 朝倉書店, 138-150.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴 I・II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集, 91p.
- 野井英明, 1989, 吉田遺跡の花粉分析. 山口大学構内遺跡調査研究年報, 7, 山口大学埋蔵文化財資料館・山口大学, p.97-102.
- 島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- 徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.
- 山野井 徹, 1996, 黒土の成因に関する地質学的検討. 地質学雑誌, 102, 526-544.
- 加速器分析研究所, 2011, 田ノ浦遺跡の自然科学分析, 山口県埋蔵文化財センター - 調査報告第74集 田ノ浦遺跡Ⅱ平成20・21年度調査, 編著者: 谷口哲一・後藤義拓・米田浩晃・山本寛子・中原香織, 山口県埋蔵文化財センター, 283-330.

図版1 プレパラート内状況写真



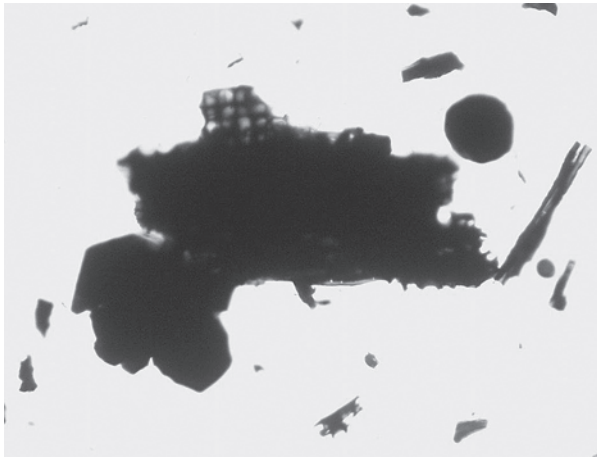
No.1 ソバ属

50  $\mu$  m



No.4 シダ類孢子

50  $\mu$  m



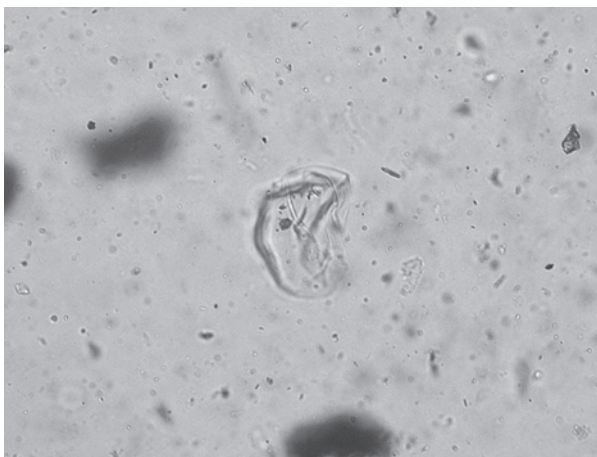
No.5 微粒炭

100  $\mu$  m



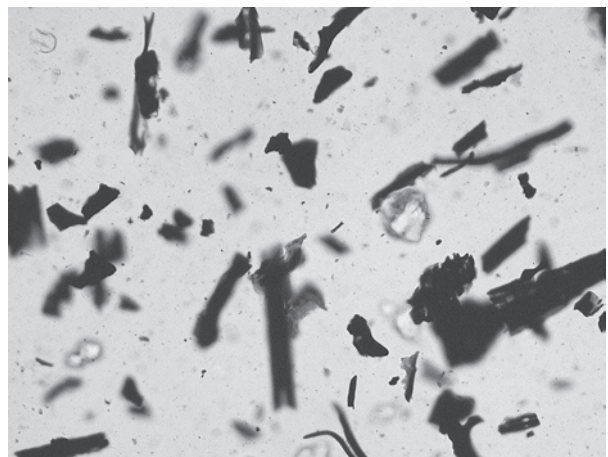
No.6 マツ属

50  $\mu$  m



No.7 イネ科

50  $\mu$  m



No.8 微粒炭

100  $\mu$  m





調査前遺跡遠景（東から）



調査前遺跡近景（西から）



遺跡遠景（西から）



遺跡遠景（南から）



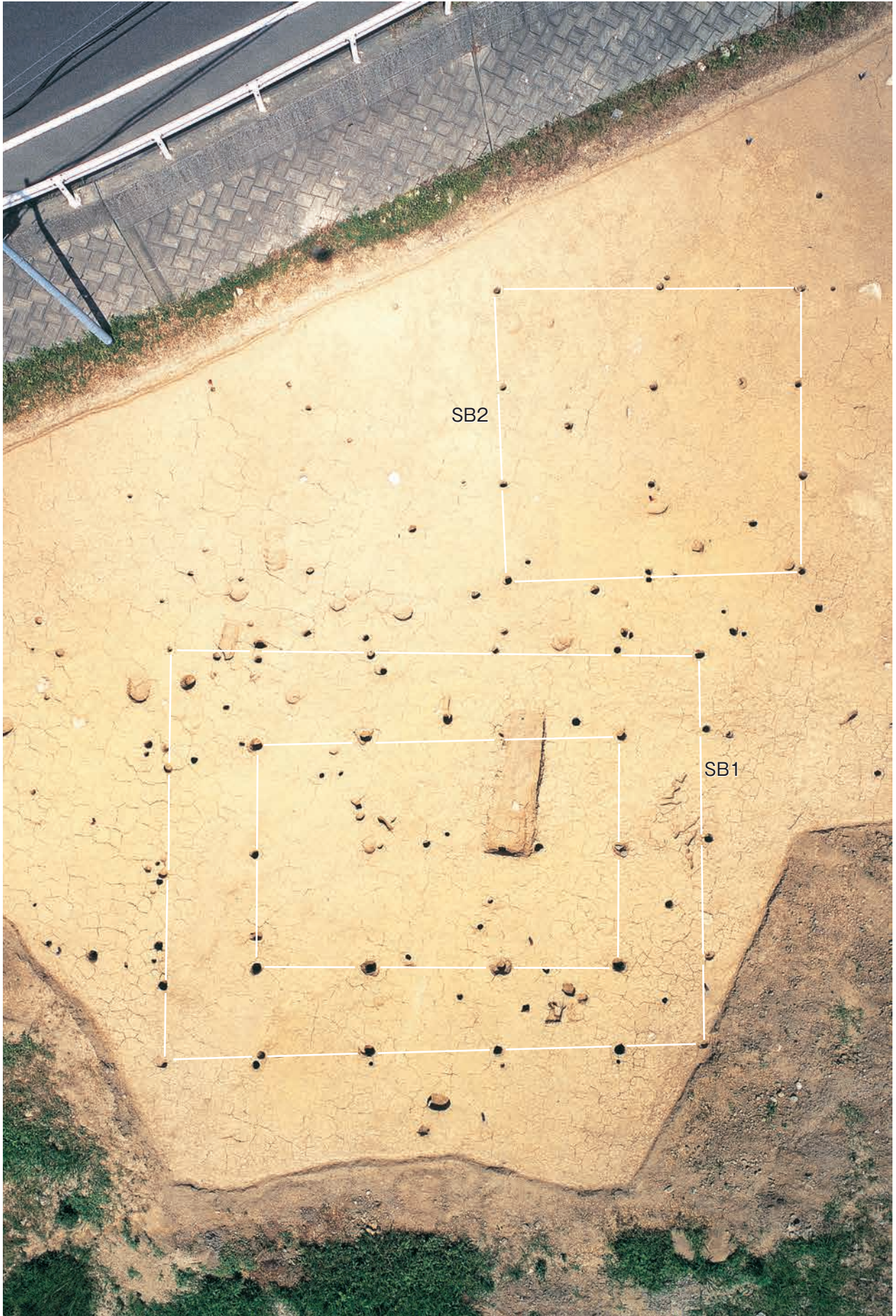
遺跡近景（東から）



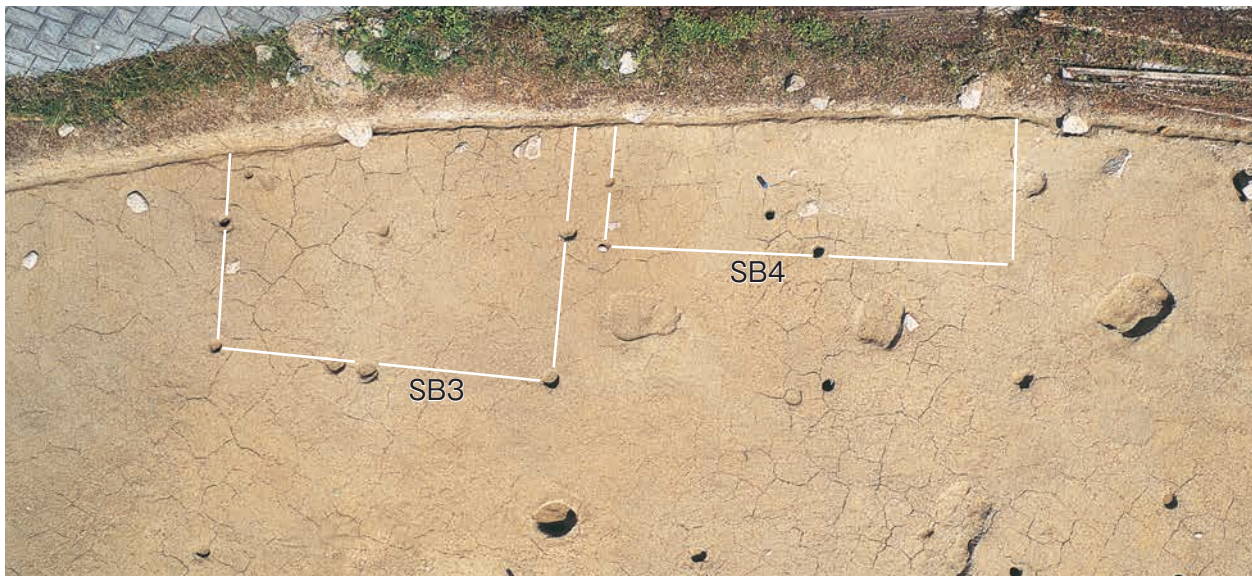
調査区全景



調査区西側遺構集中地区



SB1・SB2完掘状況



SB3・SB4完掘状況



SP87 土器出土状況 (左：上層 右：下層)



SP68 土器・土錘出土状況 (左：全体 右：部分)

図版8



SP61 土器出土状況



SP85 石鍋出土状況



SP67 土器出土状況



SP64 礫出土状況





SP84 礫出土状況



SP86 礫出土状況



SK 9 土器・礫出土状況



SK 9 土器・礫出土状況 (部分)



SK 9 土器出土状況 (礫除去後)



SK11 陶磁器・礫出土状況



SK11 陶磁器出土状況（部分）



出土遺物 (1)

图版 12



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)

图版 14



出土遺物 (4)

# 報告書抄録

ふりがな	にしはぶいせき
書名	西土生遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第79集
編集著者名	岩崎仁志 石川 彰
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2012年3月16日（平成24年3月16日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしはぶいせき 西土生遺跡	やまぐちけん 山口県 いわくににし 岩国市 はぶ 土生	35203		34° 9' 9"	132° 5' 52"	20110606 } 20110831	1,180㎡	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西土生遺跡	集落跡	古代 } 近世	掘立柱建物跡 4棟 溝 2条 土坑 18基 柱穴 約330個	縄文土器 土師器 須恵器 陶磁器 石器・石製品	掘立柱建物跡は四面廂建物を含む。

要約	内陸小盆地に面する台地上の集落遺跡である。平安時代（11世紀後半）のやや大型の掘立柱建物跡および中世・近世の土坑が検出された。掘立柱建物跡は四面廂建物と付属棟から成り、荘園関連遺構の可能性もある。また、遺構に伴わない状態で縄文時代晩期～江戸時代中期の遺物が出土している。
----	---

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第79集

## 西土生遺跡

2012年3月16日

編集・発行 財団法人 山口県ひとづくり財団  
山口県埋蔵文化財センター  
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印刷 アロー印刷株式会社  
〒751-0818 山口県下関市卸新町10-3